真・恋姫†無双 ～天の御使いと４人の使者～ 【麒麟児の書】

SUZAKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　～天の御使いと４人の使者～　【麒麟児の書】

【Ｎコード】
Ｎ０４４５Ｕ

【作者名】
ＳＵＺＡＫＵ

【あらすじ】
恋姫†無双の世界に転生者が登場します。しかも４人も！！
この話はその中の１人、天水の麒麟児に転生した男の物語です。
あの種馬も登場するよ（笑）

説明（前書き）

色々な説明や設定です。

これすらも初めてなので書き方が全く分からん…。

説明

この作品は真・恋姫†無双の二次創作です。

・主人公は転生者でオリキャラも多数います。

・能力は高めでそれぞれ特殊能力がありますがチートにはしません。

・天の御使いの北郷一刀は基本蜀√の予定です。しかし、劉備はいなかったり公孫賛には会わず徐州の陶謙の所へ訪れたりと所々内容を変更してます。

劉備はオリジナル√の君主として頑張ります。

・正史三国志、三国志演義等、参考書を多数参考にしています。

・この作品は処女作ですので誤字、脱字、キャラ口調等はご了承下さい。

・最後に……この物語には転生者があと3人います。残りの転生者の話は別の話としてそれぞれ書く予定です。

～麒麟児の転生者～（前書き）

何度も確認したけど誤字、脱字あるかも……（汗）。

因みにこの主人公の√はオリジナル√予定です。

～麒麟児の転生者～

～并州のとある山道～

「故郷を出て二ヶ月、そんで洛陽を出発して三日ってところかな？」

太陽が真上に差し掛かる青空の下、山道を愛馬の『飛電』に跨がりながら俺は呟く。

別に誰かが返してくれる訳でもないのだが数ヶ月も一人（と一匹）旅をしてると独り言がどうも多くなってしまうな。

俺の名前は姜維、字は伯約。『麒麟児』と呼ばれた諸葛亮の後継者で蜀の総司令官。

……のハズだが俺は本当の姜維ではない。

俗に言う転生者だ。

俺の本名は高嶺　迅　（たかみね　じん）　。　普通の高校三年生だったがある日、交通事故に巻き込まれて
　死んだかも分からないまま次に目を覚ました時には見知らぬ女性に抱かれた赤ん坊の姿になっていた。

動けないわ喋れないわで始めはかなり動揺したが女性の夫らしき人もやって来てとても喜んでいた。

そして俺の名前が決定し、『姜維』と命名。

最初は悪い冗談だと思ってたがどうやら本当らしい。

その後、親族が訪れて皆の会話を聞いていると字(あざな)とか天水とか聞き慣れない単語が飛び交っていた。

三国志マニアの俺は直ぐに感付いた。どうやら俺は本当に三国時代に生まれてきたようだ。

つまり俺はあの交通事故で死んで態々時代を遡って姜維に生まれ変わったってことか？

普通ならこんな時代に生まれた事を後悔するんだろうが、俺は事態を前向きに考えた。

（俺は一度死んだ身でありながら姜維として生まれ変わった。

それでいて前世の記憶を持っている。上手くいけばこの時代でも生き残れるかもしれない！）

そして俺は四歳の時、行動に移した。

まず母親から武芸を習い始めた。
　それまでは自分なりに今現在の三国時代について調べてみたが、どうやら俺の知っている三国志とは似て非なる世界らしい。

女性がかなり強かったりこの時代にはない物や料理があったり真名とかいう風習もあった。

真名は親から授かる神聖な名で認めた人以外が勝手に呼んだりしたら斬られても仕方ないぐらい大切なものである。

因みに俺の真名は『迅』だった。前世の両親から授かった名前だったからちょっと嬉しかった。

話は戻すが母親は超強く、そして超厳しいスパルタマザーでした。地獄みたいな鍛練が今となっては良い思い出だよ。本当に。

父親からは学問を教えてもらった。
　父親は元天水太守の文官で知識も豊富で家には兵法書等の書物が多くあり俺は武芸と学問を両立させながら必死になって自分の身体に叩き込んだ。

そして自分がこれから歩んで行く道を決める為、旅に出る事を決心

し十八の時に故郷、天水を出発した。そして現在に至る。

「しかしまだ黄巾の乱が起きてなかったなんて意外だったな。本来なら俺、生まれてない筈だし。」

現在の後漢王朝の皇帝は霊帝であり黄巾の乱はその前兆すら始まっていない事が判明。

洛陽で数日間滞在した俺は現在、仕官先を求め北へ向かっていた。

「ここは曹操に仕えるのがセオリーだが、まだそれほど有名ではないな。
だが袁紹が既に冀州の渤海太守になっているとは……やはり俺が生まれてるように歴史に多少の違いが出ているのか？」

飛電「……ブルルル。」

「おっと、悪い悪い。そろそろ時間だな。あそこの木陰で少し休憩としよう。」

俺の愛馬である『飛電』が少し不機嫌そうに鳴き、木陰まで行くと俺は飛電から降りて腰を据えた。

飛電とは俺が十歳の時からの付き合いだ。母親に武芸の一環として馬術も教えてもらい、その時に飛電と初めて出会った。

始めは振り落とされたり蹴飛ばされたりもしたが今では俺の大事な相棒だ。

暫く休んだ後、俺は立ち上がり飛電の頭を擦った。

「あと数刻も歩けば街がある。そしたらお前の大好物の野菜の盛り合わせをたっぷり食わせてやるからな！」

飛電「ブルル♪」

「よしよし。それじゃあ、しゅっぱ……。」

？「――――やめて下さい！！」

その時、少し遠い場所から女性と思われる声が聞こえた。

その声に混じって数人の男の声も聞こえる。

「……賊か？会話は上手く聞き取れないが、穏やかではないな。」

背負っていた武器を手に取り飛電に素早く跨がる。

「飛電、このままの向きで東北東の方角だ。走れ！！」

飛電は一声鳴くと東北東の方角へ駆けていった。

そこでの出会いが彼の運命を左右する事になるなど本人は知るよしもなかった。

～麒麟児の転生者～（後書き）

作者「どうも、初めまして。南華老仙と申します。
恋姫の二次作品を見てて自分も書きたくなり投稿しました。」

姜維「それで、この話の主人公をやらしてもらっている姜維伯約だ。」

作者「とうとうやってしまったな～。小説投稿。」

姜維「頭の中の妄想にも限界きてたしな。」

作者「皆さんの作品を見てると結構、劉備アンチが多い印象があってな。
個人的に好きなキャラのダメダメな姿を見てるともう悲しくて……。」

姜維「皆さんの作品を否定している訳じゃないんだ。　あくまでも個人的な感想として聞いて欲しい。」

作品「それなら自分が考えた外史で劉備を成長＆ａｍｐ；活躍させよう！ってことです。」

姜維「劉備、劉備って言ってるが……実際は何位なんだ？作者は？」

作者「俺個人の格付けトップ３はこれだ！」

１位　甘寧（思春）
２位　孫策（雪蓮）
３位　劉備（桃香）

姜維「呉陣営の２人の次か……。魏の連中は？」

作者「勿論、その後に続いたり、続かなかったり……。」

姜維「まぁいいや……。んで、この後の展開は？」

作者「作品の件か。大丈夫だ、頭の中では『反董卓連合』あたりまで完璧に出来てる！」

姜維「だが、拠点フェイズは考えてないだろ？」

作者「うっ……。原作キャラは原作の拠点フェイズを拝借する予定

だが…オリキャラがムズい。」

姜維「時間はたっぷりある。気長に考えるんだな。」

作者「あっ、因みに１８禁設定はしてないからそこら辺はよろしく。
」

姜維「！？　そこは『夢想』からか！？」

作者「そういう訳だ。それではまた次回！！」

～出会い～（前書き）

オリジナル√の君主になる人の登場です！

口調がこれでいいのか不安過ぎる……（汗）。

～出会い～

俺が飛電に乗って声の聞こえた先へ向かうと、林の中の少し開けた場所で五、六人の柄の悪い男共が一人の女の子に詰め寄っていた。

？「こ、これは私の家に代々伝わる大切な剣なんです。だから貴方達には渡せません！」

男A「そういう訳にはいかねぇなぁ～。そんな見栄えのいい剣、中々お目にかからねぇ。売ればかなりの値がつくぜ。」

男B「大人しくこっちに寄越してくれれば痛い目にあわずに済むぜ！」

？「嫌です！絶対に渡しません！」

男A「ちっ、黙って寄越せばいいものを。」

男C「お頭、この女、服はボロいですが身体は結構な上玉じゃありませんか？」

男A「ん？　……確かに、剣ばかりに目が向いてたがお前の言うとおりだな。」

男共は更に彼女に近付く

？「え？…な、なんですか？」

男D「最初からこうすれば良かったな。」

男E「ついでに剣も手に入って一石二鳥ですぜ。」

数人が懐から刃物を取り出す。

？「い、嫌……。誰か……！」

男B　「無駄だぜ。こんな山の中で助けなんざあるはずが……」

「いるんだな。これがまた。」

男一同「！？」

少し離れた所に飛電を待たせた俺は男達の背後の草むらから歩み出た。

俺も手に得物を持っている。はっきり言うがこいつらには負ける気がしない。

男A「てめぇ、誰だ！？」

「悪いが、悪人風情に教える名前はないんでね。」

男C「なんだと！？」

男達の視線が全員こっちに向いている。

俺は男達の後ろで若干怯えている彼女に目で訴えた。

「（今のうちに早く！！）」

それを彼女は読み取ったのかその場から駆け出し、少し離れた木に隠れた。

本当はもっと遠くへ逃げて欲しかったがさっきよりはマシか。

「警告する。怪我をしたくなければこの場から消え失せな。」

俺は軽く脅しをかける。

男A「あぁ？正義の味方気取りもいい加減にしろよ。オイ！こいつを殺っちまいな！！」

その掛け声を聞き、男達は一斉に俺に襲いかかった。

「警告は……したからな？」

決着は僅か数秒で決まった。

相手が雑魚過ぎるので無駄な戦闘描写はカットだ。

因みに俺は一人も殺してはいない。出来なくはないが近くでさっきの子が見ているのを考慮して血の海だけは避けようと思った。

結局、全員どこかしらの骨を二、三本折るだけに止まった。

あちこちで呻き声が聞こえて正直、耳に悪い。

「足は折ってないから歩けるだろ。みんなで助け合って仲良くお家に帰りな。」

男A「くっそ～。次に会ったら……」

「何だって……？」

男A「ひっ！な、何でもありません！」

俺に睨まれた男は他の男達を連れ、慌ててその場を立ち去った。

「ふぅ。取り敢えず一安心だな。まぁ、あの様子だと暫くは大人しくしてくれるかな？」

？「あ、あの……。」

「ん？」

すると、木に隠れていた女の子が俺に声を掛けてきた。

身なりは其処らの村人と変わらない服装だが、容姿はかなりレベルが高い。

年齢は俺と殆ど変わらない感じに見えたが、その女性特有の胸が……いかんいかん！！　ここは冷静になるんだ俺。

？「先程は危ない所を助けて頂き、ありがとうございます！」

彼女は屈託のない笑顔を浮かべ礼を言う。

「いやいや、俺は当然の事をしたまでだ。怪我はしてないか？」

？「はい！お陰様で♪」

「そりゃ良かった。しかしこのご時世、女の子が一人で山道を歩くのは危険だぜ？」

剣を持ってはいるが先程の様子からして人を殺した……いや、斬った事もなさそうだ。

？「実は私、幽州から近くの街までは行商人さん達と一緒に旅をしてたんだけど……途中でお互い行き先が違うから別れちゃったんだ。」

その道中でさっきの連中に襲われたって訳か。

「成る程ね、それで君の目的地はどこなの？」

？「一応、洛陽……かな？。」

「洛陽か……ここからだと馬があって二日。歩きだと最低三日はかかるぞ？」

？「うぅ……。洛陽までまだそんなにかかるのか～。」

彼女はちょっと落ち込んでいる。

「洛陽に行ってどうするつもりなんだ？」

？「あ、違うよ。洛陽が目的地って訳じゃないの。」

「？……一体どういう事なんだ？」

？「えっとね、ある日私の村に奇妙な格好をした占い師が来たの。
　みんな怪しがって誰も近付かなかったんだけど、私の顔を見た途端に『お金はいらないから占わせてくれ！』なんて言うから占ってもらったの。」

占い師……か。

「変な占い師だな。それで結果は？」

？「『貴方はこの国を救う力を持っている！力を手にしたくば、南へ向かいなさい。
　そうすれば必ず貴方の力になる【天の御使いの使者】に出会えるでしょう！』だって♪」

だって♪…ってオイ！！

「……それで幽州から洛陽を目指してここまで来たっていうのか？」

？「うん♪」

いや、そんな自信満々に頷かれても……。

「騙されたとは思わないのか？」

？「だってその占い師さん結局お金を受け取らななかったし、私を騙しても何にも得るものなんて無いんじゃないかな？」

……確かにそれはいえるな。

？「それに、本当に私の力でこの国が平和になるなら……絶対やらなきゃ駄目だよ！」

彼女は急に強い口調で言った。

？「漢王朝は腐敗して世の中は乱れ、盗賊が蔓延り、弱い人達が傷付き、大切なものを守ることが出来ずに多くの人々が亡くなっていく……。

そんなの私は嫌っていうほど見てきたけど、……絶対おかしいよ。

だから私はそんな嘘かも知れない占いにも賭けてみたいの！

もし、その御使いの使者が私にこの国を救う力をくれるなら私は何でもする！何だってする！何がなんでもその人を絶対に見つける！！

……そういう想いがあって旅に出ようと決めたの。」

彼女は悲しげな表情ながらも自分の想いを俺にありったけぶつけてきた。

？「ご、ごめんなさい！いきなり大声だしちゃって。こんな事、言われても迷惑だよね？

別に気にしなくていいよ！私の勝手な決意だし……。」

我に返った彼女は慌て謝罪し、苦笑いを浮かべた。

そんな彼女を見て、俺はある決断をした。

「……よし。決めた。」

？「ふぇ？何を……ですか？」

「その占い師が言った『御使いの使者』を探すの、俺も手伝うよ。」

これには理由とか根拠とかそんなのは一切ない。あったのは……直感だ。

？「えぇ！？そんなの悪いですよ。私が勝手に決めた事ですから貴方を巻き込むなんて……。」

「俺も勝手に決めた事だ。君が悪いなんて思わなくていいよ。それにさっきの様子だとまた危ない目にあいそうだしね。」

？「うぅ……すいません。」

彼女はしょんぼりしている。

「謝らなくてもいいって。俺、旅をして三ヶ月にもなるけどまだこの先どうしようか何にも考えてなかったんだ。

けど君に出会って、君の想い、覚悟、そしてその何一つ曇りの無い瞳を見て感じた。

この国を本当に救えるのは力が強い人とか権力で支配するような

人間じゃなくて……君の様な芯が強く、人を思いやることが出来る心の優しい人なんじゃないかなって。

俺はそんな君がこれから進んで行く道を共に歩みたい！道を遮る障害は俺の力で全て取り除く！！

もし、御使いの使者が見つからなかったとしても、俺が君を導いてやる！！

……後は君の返答次第だ。」

？「……／／／」

彼女は暫く黙ったまま考えているようだった。少し顔が赤いのが気になるが……。

こんな柄にもない台詞を言ってしまったが彼女が俺に本音をぶつけてきたなら、俺も彼女には本音を言ったほうが良いと思ったんだけどな～。

やはり、いきなり押し付けがましいお願いは聞き入れられないのかな？

そして彼女は口を開いた。

？「とても……嬉しいです！けど、本当にいいんですか？」

俺は黙って頷く

？「それじゃあ……お願いしようかな？旅は人数が多いほうが楽しいし♪
色々迷惑かけると思うけど、よろしくね！……え～と…？」

「あれ？そういえばお互い自己紹介がまだだったな。
まずは俺からだ。性は姜　名は維　字は伯約だ。よろしくな！」

？「はい！お願いします姜維さん。……次は私の番ですね。」

俺は彼女の名前を聞いた瞬間、自分の耳を疑った。

「性は劉　名は備　字は玄徳だよ。よろしくね♪」

～出会い～（後書き）

作者「どうも作者です！」
姜維「姜維だ。」

作者「今回はオリ√の君主兼、ヒロインの登場だ！」
姜維「前回でモロにネタバレだったしな……。大丈夫か？」

作者「大丈夫だ。問題ない。取り敢えず今回から後書きは物語の現在地や登場人物の説明にする。」

姜維「現在地は……たしか并州だったな？」

作者「そう。洛陽がある司州の北にあたる州だ。」

姜維「なんで并州なんだ？劉備の出身地の幽州から南っていえば冀州→エン州→豫州の順だと思うが……。」

作者「地理的にはそうだな。しかし、そこは2人の個人的理由で并州にした。」

姜維「劉備と俺のか？」

作者「そう。まず劉備は物語で洛陽を目指していた。　これは御使いの使者の情報を求めていたからで、道順は幽州→冀州でそこから道に少し迷って并州にいたということ。」

姜維「まぁ……彼女なら仕方ないか。」

作者「それで君はその……北が好きだからな♪」

姜維「北伐関連か……。」

作者「他にも仕官先を探していたとか色々理由考えてたけどね～。やっぱり『姜維』だし。」

姜維「もういいよ、それで。次回もこんな感じの後書きか？」

作者「いや、次はキャラの能力について書こうと思う。
【説明】にも少し書いたが、あれだと主人公がどれ位強いか分からないからな。」

姜維「それでは長文失礼した。ではまた次回！」

～御使いの使者?～（前書き）

週に1、2回の投稿を目指します！

～御使いの使者？～

彼女の名前を聞いた時、俺は自分が今まで過ごしてきた３６年間（転生前と転生後）の中で姜維に転生した時の次ぐらいに驚いた。

いや、別に劉備が女であることに驚いた訳ではない。

俺が天水にいた時に涼州の西涼太守『馬騰』が女性であることを知ったし、旅の途中で渤海太守『袁紹』も女性であることが分かった。

そこから推測でこの世界の武将は、性別が女性の可能性があるということを頭にいれた。

だから劉備が女の子というのはすぐに納得したのだか……。

問題は『何故、劉備がこの時期にここにいるのか？』である。

黄巾の乱も始まっていない今、史実ならまだ幽州で筵売りをしていても不思議ではない。怪しまれないように本人に確認したら、本当に筵を売って母親の家計を助けていたという。

ではあの有名な『桃園の誓い』はしたのだろうか？

これも聞いたところ、なんと劉備は関羽や張飛という人物を知らなかった。

訳が分からん……。

何故、占い師は南へ行けと言ったのか？とか、その占い師は一体何者なのか？など謎が謎を呼ぶが、答えがでるはずもなく…。

まぁ取り敢えず『天の御使いの使者』とやらを探せば答えが分かるかもしれないと思い、劉備と旅をする事にしたのだか……。

その『御使いの使者』、どうやら俺のようです。
どういう事なのか説明しよう。

桃香は占い師の話を聞いて二週間後に彼女の故郷、桜桑村を旅商人達に付いていく形で出発した。

しかしその前日、同じ場所にあの占い師がまた現れ、通りかかった桃香をまた呼び止めたという。

そして前に話した『御使いの使者』の手掛かりを教えてくれたらしい。

その手掛かりとは……。

【その一】
使者は天の御使いを支える為に、この国の人間として生まれ育った。

【その二】
使者は全員で四人、そのうち貴方（劉備）に出会うのは西方の出身の者。

【その三】
その人物は知勇を兼ね備え、彼の武器は他の者が決して振るうことが出来ない不思議な棒である。

【その四】
彼の乗る馬は金色の鬣（たてがみ）を生やし、その速さは雷の如し。

……以上だ。

順番に俺に当てはめてみる。

【その一】
『天の御使い』が誰だか知らんが俺がそいつの補佐をする役目としてこの世界に転生した……ということでいいのか？

【その二】
残りの三人が気になるが、桃香に出会った俺は涼州の天水郡冀県出身。

【その三】
武に関しては自信があるし、知識の方も色々学んだが、何せ転生前は『三国志マニア』と周りに言わせる程の三国志好きである。

あと武器の件は確かに事実。しかし説明は面倒だから省略する。

【その四】
俺の愛馬である飛電の鬣は金色、速さは雷とまではいかないが天水にいた頃、試しに限界まで飛電に走ってもらったことがある。

朝、天水を出発し多少の休憩を挟んで南下して、夕日が沈みかけた時に成都に到着した。

……まぁ、ぶっちゃけスゴい馬だな。

まぁ間違いなく御使いの使者は俺だとは思うが、今告白するとややこしくなるので劉備には伝えていない。

劉備も俺がその使者とは今のところ、思ってはいないようだがバレるのも時間の問題だ。

頃合いを見て彼女には本当の事を話すか……。

そして現在、俺と劉備は并州から南下し、洛陽を抜けて南陽郡に差し掛かっていた。

劉備「はぁ～。結局、洛陽にもいなかったね。」

劉備は溜め息をつく

「それもそうだろ。この国で生まれた人間なら、あんな所に長居しても無駄だっていうのを知ってるだろう。」

宦官の悪政は洛陽にも多大なる影響を与え、都といえども盗人やごろつきが度々悪事を働いている。そんな所に住むという考えは俺にはない。

「もっと治安がいい県や郡は探せばいくらでもある。まぁ取り敢えず今は南へ進むだけだな『桃香(とうか)』。」

劉備「……そうだね。頑張ろ『迅』君。」

因みに俺達は互いに真名を預けた。しかも俺が桃香の旅に付いていくと決めたその日に。

いきなり真名を受け取るとは思わなかったが、これから一緒に旅をするわけだからそれも当然なのだろう。

桃香は始め俺を「さん」付けで呼んでいたが、年が殆ど変わらないのでやめるよう頼み、最終的に「君」付けで手を打った。

「もうすぐ南陽郡だが、路銀は大丈夫か？」

桃香「ちょっと待って。……うん、まだ十分残ってるからこれだと二人で五日分かな？」

「よし、そろそろ野宿生活からは抜け出せそうだな。」

桃香「朝、起きると身体があちこち痛いからね。ふかふかの寝台でゆっくり休みたいな～。」

そんな他愛もない話をしていると、ふと鼻に血の臭いが入ってきた。

飛電「ブルルッ！」

飛電も気付いたのか少し荒い声を漏らす

「……それほど遠くはないな。そして、時間もあまり経過していない。」

桃香「？……どうしたの迅君？」

「血の臭いがする。それも人の血だ。」

桃香「え！ど、どこから？」

「ここから少し先だ。俺がちょっと見てくるから桃香は時間を少し

空けてから飛電と一緒に来てくれ。」

桃香「分かった。気を付けてね。」

俺はその臭いの発する元へ駆け出した。

さて、次は一体誰に出会うのやら……。

～御使いの使者？～（後書き）

作者「おいっす！今回は前回お伝えした通り主人公の能力を公開したいと思います。

姜維「『チート嫌い』のタグがあるから一体どうなんだ？」

作者「まぁはっきりいえばかなり強めだ。関羽や夏侯惇と互角とでも思ってくれ。」

姜維「そうなると呂布に勝つのは……。」

作者「かなり難しいな。けどそれはあくまでも『実力』だけで戦った場合だ。」

姜維「【説明】に書かれていた特殊能力の話か。」

作者「その話は日を改めて話そう。それでは早速オリ主の能力を見てみよう。」

統率…軍勢を率いる能力
武力…純粋な戦闘能力
知謀…兵法、計略等の知力
政治…内政における能力
人望…民や将からの信頼度

これらを7段階で数値化した。

姜維

統率6
武力6
知謀5
政治4
人望7

因みに劉備はこうなる。

劉備

統率3
武力2
知謀2
政治3
人望7

作者「これらの能力は鍛えれば随時変わっていく。例えば最終的には劉備の武力は馬岱と同等にする予定だ。」

姜維「次回は南陽についての解説をする。それではまた！」

～南陽付近にて～（前書き）

戦闘描写はムズいよなぁ。

殴る時の効果音あるけど、実際はあんなに音響かないよね（笑）

質問や指摘があれば出来る限り返信するつもりです。

～南陽付近にて～

血の臭いをたどった先で1人の女性が1人の少女を庇うように20人弱の盗賊の相手にしていた。

辺りには7、8人の盗賊の死体が転がっている。おそらく臭いの発生源はそこからだろう。

賊A「この女、思った以上にやるじゃねぇか。」

賊B「始めの連中は油断してやられたが、流石に俺達全員でかかれば勝ち目はねぇな。」

女性「くっ！やはり彼女を守りながらではこちらが不利か……。」

得物を構える女性が呟く

少女「ふわわわ……。旅人さん、これ以上はあなたにも危険が及びます。私に構わず逃げて下さい！」

女性「それは出来ない！武の頂を目指す者として、力なき民を見捨

てる訳にはいきません。必ずやお救いいたします！」

賊C「威勢はいいが現実はそう上手くはいかないぜ。」

賊D「俺達が2人まとめて可愛がってやるよ……へへへ。」

ジリジリと距離を詰める盗賊達。

そこへ……

「隙あり！！」

ドコォ！

賊B「ぶへぇ！！」

俺が乱入し、賊を1人ぶっ飛ばした。

賊D「な、なんだテメェ！」

「この場合は……そこの2人の救世主かな？」

女性「えっ？」

少女「ふわわ！？」

賊Ａ「この野郎、不意討ちとは卑怯な真似を……。」

「女１人を男が数十人がかりで相手する方がよっぽど卑怯だろが！！」

バキャ！

賊Ｄ「ぐはぁ！」

俺はそう吐き捨てて賊の頭上を跳び、女性に一番近い奴を叩き潰して女性の横に降りる。

女性「貴方は一体……？」

「今は救世主ってことで、詳しい紹介はこの状況を打破してからだ！」

女性「分かりました。助太刀、感謝いたします！」

賊Ａ「たかが男１人で何が出来るってんだ！くたばりやがれ！！」

俺と女性は襲い掛かってくる賊共を次々と倒していった。

彼女の持つ武器は反った幅広の刀身が特徴的な長柄の武器で、あの『偃月刀』に酷似している。

それを扱うだけあり、彼女の腕は武人としてただ者ではない事がよく分かる。

賊Ａ「そこまでだテメェら！！」

女性「！？」

「なっ！……。」

いつの間にか後ろに回り込んだ賊の最後の１人が少女に刃物を突き立て人質にとってしまった。

「クソ！……俺としたことが！」

女性「彼女を放しなさい！」

賊Ａ「そうはいくか！ここは一先ず退かせてもらうぞ。もし追ってきたら……分かるよな？」

男は人質にとっている少女に刃物を近づける。

少女「うぅ……。」

俺達は下手に動けないまま少しずつ男との距離が遠ざかる。

賊A「残念だったなお前ら！それじゃ、あば……」

桃香「えい！！」

ボカ！！

賊A「ぐへぇ！？」

俺達に注意が向いていた男の後ろから桃香が思いっきり木の棒を頭に殴りつけた。

男は倒れ、人質の少女も男の腕から解放された。

桃香「大丈夫？怪我とかしてない？」

少女「は…はい。ありがとうございます。」

俺と偃月刀?を持った女性は2人の所に駆け寄った。

「よかった～、助かったよ桃香。」

桃香「ふぅ～、びっくりしたよ。迅君に追い付いたと思ったら女の子が連れて行かれそうになってるんだもん！」

女性「お二方は……知り合いですか？」

「あぁ、一緒に旅をしている…」

桃香「劉備だよ。よろしくね♪」

「…んで、俺が姜維だ。」

女性「私の名は徐晃と申します。劉備さん、姜維さん。危ない所を助けていただきありがとうございます。」

少女「わ、私は徐庶といいます。劉備さん、本当に助かりました。」

「（うわっ！徐晃ってあの魏の五将軍で有名な武将じゃないか！？

そして徐庶といえば劉備に諸葛亮を紹介した名軍師だよな？三国志の有名人と出会い過ぎたろ俺！？）」

徐晃「……どうかしましたか？姜維さん。」

いつの間にか考え込んでしまっていたようだ。

「いや、先程の動きからしてかなりの腕前とみた。
こんなところにいるのが不思議なくらいだ。何処かに仕官でもしているのか？」

徐晃「いえ、私は自分の武を振るうに相応しい人物を探しこの大陸を旅しています。
それに……おそらく今の私の力では姜維さんには及ばないかと。私もまだまだ修行が足りないようです。」

「いや、そんな謙遜しなくても……。」

あの徐晃に誉められるなんて、ちょっと照れる。

桃香「それで、徐晃さんと徐庶ちゃんは一緒に旅をしてたの？」

徐庶「私はお母さんに頼まれて南陽に買い物へ行った帰りでした。

一応、護身術は身に付けているんですけど……流石に人数が多すぎでした。」

徐晃「そこに偶然、私が通りかかり……そこからは2人が見たとおりです。」

桃香「何はともあれ無事でよかったよ～♪それで、たしか徐庶ちゃんは買い物帰りだったよね？
ねぇ迅君、せっかくだから家まで送ってあげよ？」

「そうだな、ここからどれくらいなんだ徐庶？」

徐庶「すぐ近くです。助けてくれたお礼もしたいので、私の家に来てくれませんか？
食事だけでなく、空き部屋もあるので是非使って下さい。」

桃香「本当！？やったね♪迅君！徐晃さん！」

「桃香、少しは遠慮ってものを……まぁ日も暮れてきたし、お言葉に甘えようかな。」

徐晃「私もよろしいのですか？」

徐庶「はい、勿論ですよ！」

「俺達が来るまで彼女を守っていた命の恩人じゃないか。一緒に招待されようぜ。」

俺達４人は徐庶の案内で彼女が住んでいる村にたどり着いた。

徐庶の屋敷に招待され、助けてもらった事を聞いた徐庶の母親は俺達３人を心から歓迎してくれた。

食事の時には徐庶が作ってくれた料理もいくつかあり、その味は美味でありながら庶民にも親しまれるような優しい味だった。

料理を堪能した俺達は旅の疲れを癒すため風呂に浸かり、貸してもらった部屋で早めに就寝した。

久しぶりの寝台であっという間に俺達は眠りについた。

～南陽付近にて～（後書き）

作者「よし、順調に更新が出来たぞ！」

姜維「週に1、2回は投稿したいよな。」

作者「そして今回から新たなオリキャラの登場だせ♪」

姜維「個人的に原作に出て欲しかったキャラと名前だけ登場したキャラの二名ときたか。」

作者「詳しい説明はまた今度にして、今回は現在地付近の南陽についてだ！」

姜維「南陽はたしか原作では北郷が呉√の時に孫策達に出会った場所だよな。」

作者「うむ、しかし本作品は孫策達は南陽にいないぞ。」

姜維「じゃあ、どこに？」

作者「それは後々分かっていくから黙秘とする！」

姜維「そうか……。んで、三国志での南陽はどういう所なんだ？」

作者「この時代ではかなり人口が多い郡で一州に匹敵する程の人口がいたらしい。」

姜維「具体的な数は？」

作者「サイトで色々調べたら約２４４０００人だとか…。」

姜維「この後漢の時代にそんなにいるのか？」

作者「どの年代での人口までは分からなかったのが残念だ。」

姜維「『郡』だから官職は太守か……そして本作品は黄巾の乱がまだ始まってないが、その時の太守って誰だ？」

作者「史実なら『チョ貢』という人物が太守だ。ただし、黄巾の乱が勃発すると『張曼成』によって殺されてしまうがな。」

姜維「本作では？」

作者「恋姫の設定で『荊州太守』というよく分からない役職のあの袁家の娘を南陽太守にした。」

姜維「それだと荊州の刺史は一体……？」

作者「それも本作品のオリキャラにした。次回については初登場したオリキャラ2人について話そう。」

姜維「それではまた次回！」

～村に忍び寄る危機～（前書き）

作品上の都合で作者名を変更させといただきました。

～村に忍び寄る危機～

早朝、目覚めた俺は日課にしている鍛練をするため、村から少し離れ木々の開けた場所に向かった。

「ん、あれは……？」

どうやら先客がいたようだ。

徐晃「ふっ、はぁぁ！」

ちょうど鍛練が出来そうな場所で徐晃が武器を振っていた。

流石は後に魏の五将軍になる人だ。女性ではあるがその構え、足捌き、太刀筋そのどれもがただ者ではない事を物語っている。

徐晃「……いつまで見ているおつもりですか？」

「おっと、気付いていたか。」

徐晃「つい先程です。姜維さんも鍛練を？」

「まぁね。日頃の日課みたいなものさ。徐晃もそうか？」

徐晃「私も同じです。旅の朝は出発前に必ず行っています。」

「もしかして、邪魔したか？」

徐晃「いえ、そろそろ一息いれようと思っていましたから。」

「そうか？それじゃあ今度は俺が……。」

そう言って徐晃は近くの岩に腰掛け、俺はさっきまで彼女がいた場所に行く。

「それじゃあ、早速……」

それから暫くの間俺はいつも通りに鍛練をした。その間、徐晃は常に目線を俺に向けていた。

「えっと……徐晃？」

徐晃「？……どうかしましたか？」

「いや、そんなに見られるとちょっと……。」

徐晃「先程は姜維さんも同じように私を見ていたと思いますが？」

「えっ！そ、そんなに見てたかな？」

徐晃「えぇ、私が気付いてから声をかけるまでずっと……。」

徐晃の視線がイタイ（汗）。
これはちょっと弁明しないと不味いな。変な誤解をうけるのだけは避けたい。

「そ、それは……徐晃の動きが剣舞をしているかのように思えてな、つい見惚れちゃって……。」
」

徐晃「えっ！？そ、そうでしたか。……ありがとう……ございます……。」

出会ってから初めてかな？徐晃がこんなに動揺したのは。大人びてる印象があったけど、照れると女の子に戻るんだな。

徐晃「そ、それより姜維さんの武器は変わってますね。細く軽そうで刃が付いていないようですし…。」

「えっ？あぁ、これのことか？まぁ見た目はただの棒に見えるけど実際は凄い代物だぜ。」

徐晃「どう凄いのですか？」

「実はな……」

そう言って俺が説明しようとした時、

男「た、助けてくれぇ！！！」

茂みから男性が一人飛び出してきた。服があちこち破れている。

「お、おい！あんた、一体どうしたんだ？」

男「村が……村が賊に襲われたんだ！！」

徐晃「なんですって！？それは何処の村ですか？」

男「この近くの村（徐庶の村）から１０里程離れた所にある村だ。
俺は村長の頼みで荊州の刺史に近辺で盗賊の被害が絶えないから何とかするように書状を送りにいったんだ。
それで帰ってきたら村が燃えてて……みんな…奴らに……。」

男はガタガタと身体を震わしている。おそらく食料は奪われ、多くの人が殺されたのだろう。

「まさか、こっちの村にも！？」

男「あぁ、２日休んだ後にこっちも襲うらしい。だけど、一昨日の夜の事だから実質明日には襲われちまうよ！！」

徐晃「姜維さん、大変です！直ぐに村の人達に知らせなくては……。」

徐晃が村に向かって走りたす。だが、

「待て！徐晃！！」

俺は彼女を止めた。

徐晃「！？　何故止めるのですか？このままでは村の人達が……！」

「気持ちは分かる。けど、そんな事をいきなり村人に伝えてみろ。
みんな混乱状態に陥って正しい判断が出来なくなってしまうぞ！」

男「じゃあ、どうすんだよ！？早く逃げないとこっちも危ないぞ！
！」

「落ち着けおっさん。まず最初は村の代表に話してからだ。いくぞ
！！」

俺は男をおぶって徐晃と一緒に村に向かった。

～徐庶の住む村～

桃香「あっ！迅君に徐晃さ…ってどうしたの！？その背負ってるお
じさん？」

徐庶「何かあったのですか？」

村に戻ると桃香と徐庶が一緒に徐庶の家の前にある長椅子で本を読んでいた。

「2人共、よく聞いてくれ。一昨日の夜、近くの村が賊に襲われたんだ。」

桃香「えぇ！？」

徐庶「ふわわ！？ほ、本当ですか？」

男「あぁ。俺はその村の生き残りだ……。明日にはこの村も襲われるぞ！」

桃香「そんな！みんなに知らせないと…。」

徐庶「いえ…。それは危険です。」

どうやら徐庶も分かっているようだ。

桃香「徐庶ちゃん、それはどういうこと？」

徐庶「そんな事をいきなり言われて冷静でいられる人なんていませ

ん。
　ましてや戦には無縁の人達ですから村全体が大混乱してしまいます。」

桃香「なるほど～。確かにそうだね。徐庶ちゃん凄いよ♪」

徐晃「感心している場合ではありません！
　今は適切な行動をして村人の混乱を最小限にしなくては…。」

「徐庶、この村の村長に会わせて欲しい。あと、村の自警団がいればその人達もだ。」

徐庶「分かりました。直ぐに案内します！」

「徐晃、君は自警団の人を村長の屋敷に集めるよう手配してくれ。」

徐晃「分かりました。早速向かいます。」徐晃は自警団の宿舎を目指し走っていった。

桃香「わ、私に出来ることはない？」

「桃香は……徐庶のお母さんに事情を説明して、対策が出来た時に

村の女性達を先導してくれるように頼んで欲しい。」

桃香「了解。私に任せて！」

こうして俺達はそれぞれ行動を起こした。

～村長の屋敷～

十分後には屋敷に俺達と村長、自警団の代表者が数名が集まった。

俺は早速、事情を皆に説明した。やはり聞いた直後は村長達も動揺を隠せないでいた。

村長「して……その賊のおおよその数は？」

男「二百…いや三百はいたと思う。」

自警団員A
「おいおい……この村の自警団は五十人位しかいないぞ！？」

自警団員B
「いくら何でも数が六倍じゃあ無理だって！」

「戦える人はあんた達だけじゃないだろ。この村の男性達も含めて考えて欲しい。」

村長「我々は戦を知らぬ。素人が無闇に出ていっても人を殺し慣れている奴等が相手では厳しいぞ。」

徐晃「賊も元々は貴方達と同じ農民育ちが多いはずです。勝てない訳ではありません。」

村長「しかし……。」

村長は決め兼ねている。

自警団C
「やっぱり……逃げた方がいいんじゃないか？」

そんな事をポツリと呟く

桃香「……逃げて、その後はどうするんですか？」

自警団C「えっ？」

桃香「皆さんはこの村で生まれてこの村で育ってきたんですよね？
それなのに、盗賊に食べ物やお金を全部奪われて逃げ出した後、
どうやって生活していくんですか？」

徐庶「盗賊になっていく過程は色々あります。
その中には盗賊に襲われ全てを奪われてしまい、自分達が生きて
いく為に盗賊になってしまう人もいるんです。」

徐晃「貴方達は……自分の妻や子を養う為に人を殺す覚悟があるん
ですか？」

桃香達の話を聞いて村長や代表者達は黙ってしまった。

「俺達も村を守るのに協力する。だけど俺達だけでは限界がある。
本当に村を救う為にはみんなの力が必要なんだ。　頼む！村を救
う為に力を貸してくれ！！」

俺は村長に頭を下げた。

村長「……おかしいのぅ。本当なら儂らがお願いする立場なの
に、旅のお方が儂らに頭を下げておる……。」

自警団A「お前ら……やるぞ！俺達の帰る場所を守るんだ！」

自警団B「そうだな。戦う前から諦めたらいけないよな！」

自警団C「俺、他の連中に伝えてくる！」

よし、村の代表達が戦う意欲を持ってくれた。これで第一段階は成功だ。

村長「それで……儂らはどうすればいいのだ？」

「まずは作戦を練る、出来次第、村の皆さんに盗賊の襲撃とそれに応戦する事を伝えてくれ、策については俺から説明する。」

村長「よし、分かった。」

そして、俺達は初めてになるであろう戦で勝つために第二段階に行動を移した。

～村に忍び寄る危機～（後書き）

作者「ようやく投稿出来た～！」

姜維「いきなり作者名変更とはどういう事だよ！？」

作者「だから作品上の都合なんだって。仕方ないだろ。」

姜維「という事はまさか……。」

作者「まぁ『麒麟児の書』に登場するかは今のところ不明だな。」

姜維「そうか、それで今回はたしかオリキャラの紹介だよな。」

作者「徐晃、徐庶の同姓コンビだな。まずは演義での2人の活躍を紹介しよう。」

徐晃

魏の五将軍の1人。トップクラスの統率力を誇り敗戦を経験した事がないといわれている。武に関しては官渡の戦いの一騎討ちで文醜に一度は敗れたが、後に親友の関羽と互角に渡り合える程の猛将と

なる。しかし最後は孟達の裏切りによって戦死してしまう。

作者「因みに正史では戦死してなく、それよりも前に病没となっている。個人的にも大好きな武将の1人だ。」

徐庶

劉備が諸葛亮を軍師に迎える前に仕えていた人物で始めは単福という偽名を名乗っている。司馬徽の私塾で諸葛亮や鳳統と勉学に励んでいた。曹操軍が攻めて来た時、敵将曹仁の『八門金鎖の陣』を見事に敗り曹操に一目置かれる存在となる。そして程立の策によって劉備軍を離れ、代わりとして諸葛亮を紹介した。
曹操に仕えた徐庶だが一切その才能を曹操の為に発揮しなかった。
赤壁の戦いでは鳳統が仕掛けた連環の計にいち早く気付き曹操が大敗する前に陣営を抜け出した。

作者「因みに正史では程立の策で劉備軍を離れたのは演義での創作である。そして単福という偽名も演義の作者が勘違いしたものだという。」

姜維「次回も2人について書こうと思っている。では長文失礼した！」

～勝者は事前の措置で勝ってから戦いに挑む【魏武注孫子】抜粋～（前書き）

更新遅れました。
さすがに週１は更新したいと思います。

会話が連続で続くのは情景描写が下手だからです。
原作も会話が続くことが多かったし……いいよね？

～勝者は事前の措置で勝ってから戦いに挑む【魏武注孫子】抜粋～

第二段階は作戦を練る事だ。その為に色々と調べる必要がある。

「まずは敵の現在の状況を詳しく知る必要がある。誰か偵察を頼めないか？」

村長「それなら、村の中で馬の扱いに慣れてる者に行かせよう。」

村長がそう言うと数人が馬を出して襲われた村の方角に向かった。

「あと、この村周辺の地図が必要だが……これでいいか？」

俺は自分が所持している地図を取り出す。

徐庶「……これは旅商人が使う地図ですね？」

「あぁ。そうだけど？」

徐庶「それならこの地図に書かれていない道があるはずです。

街や村との最短距離しか書かれていないと思うので……。」

村長「儂が見た限りでも三つ程道が足りないのぅ。村の衆に聞くのがよいと思うぞ。」

……と、俺達は勝つための様々な情報を集めてそこから策を練ろうとしている。

桃香と徐晃には武具店や鍛冶屋の店主に事情を説明し、武器や防具の提供をお願いしている。

「戦える村人の総数は？」

村長「女衆や儂ら老人を抜かせば１２０人程かの？」

徐庶「二倍弱の差ですか……そこは策で補いましょう。」

「あぁ。俺も協力するよ。」

徐庶は司馬徽の私塾である『水鏡女学院』での勉強の全課程を終了させたようで、しかも彼女流の暗記術があり全ての科目の内容が頭の中に入っているらしい……。

見た目は可愛い女の子だが、やはり三国志に名を残す人物だ。凄いとしかいいようがない。

と、そこへ……。

桃香「迅君！村長さん！武器屋も鍛冶屋の店主さんも武具の提供してくれるって！」

「そうか。ありがとう二人共。」

徐晃「事情が事情ですからね。お二人共、二つ返事で引き受けてくれました。」

「武器に関しては無事解決っと。」

桃香「そろそろ、みんなに伝えた方がいいんじゃないかな？」

「敵の情報が少ないが、それは偵察の人が帰ってくるまで何とも言えないな。」

徐庶「いくつか策は考えついてますし、作戦は後で伝えるとしてまずは現在の状況を説明しましょう。」

「そうだな……村長さん、行きましょう。」

村長「うむ、では早速村の衆を広場に集めるぞ。」

こうして俺と村長で広場に集まった村人全員に盗賊の襲撃の事、それに応戦する事など現在の状況を分かりやすく説明した。

始めは多くの村人が驚き、ざわめいたが村長の決意と覚悟を聞いて皆、それに答えてくれた。

村長「我らの村を我らの力で賊の魔の手から守るのじゃーーー！！」

村人達「うおおぉぉぉぉ！！！」

よし、上手くいった！

後は作戦によって被害を最小限にする事を考えよう。

そして武器屋や鍛冶屋の店主から武器や防具を提供してもらい、村の男達に配った。

そこから俺と徐晃で基本的な武器の構えや動きを皆に教える。
気が付けば日は暮れて夜になっていたのでひとまず村人達を休ませ俺も少し休憩することにした。

そして朝日が登り始めた時

自警団員A「おい！偵察にいった連中が帰ってきたぞ！」

その報告を聞き俺は直ぐに屋敷に向かった。

「どうだった？」

村人A「あのおっさんが言った通り数は三百位だ。けど、馬に乗ってる連中もいた。」

「騎馬か……。数は？」

村人B「五十ってところだな。あと率いている奴の情報だが、やっぱりここ周辺でも有名な『厳政』って奴だ。」

「そいつの目印になるような特徴はあったか？」

村人C「目印かい？……図体がデカくて髭を蓄えてて、あとそい

つの馬、額に白い模様があったぞ！」

額に……白い模様？

まぁ何か引っ掛かるが気のせいだろう。

「それだけあれば十分だ。偵察、ご苦労だった！」

村人A「へっ、どうって事はないさ。それに俺達は偵察役で、他の連中は奴等と戦うんだろ？」

村人B「俺達に出来る事、他にないのか？このままだとみんなに申し訳ないよ。」

村人C「馬の扱いに関する事なら任せておけよ！」

「馬を使った策か……徐庶に聞いてみるか。」

こうして着実に準備が整っていき、次第に緊迫した雰囲気が漂ってきた。

最終段階として俺は徐庶と考えた今回の作戦を皆に説明しそれぞれ行動に移した。

～勝者は事前の措置で勝ってから戦いに挑む【魏武注孫子】抜粋～（後書き）

ども更新遅れました作者です。

今回から姜維は物語で本格的に活躍するので1人でいきたいと思います。

さて、前回の後書きで徐晃、徐庶の説明をしましたが間違えていたり説明が足りない所があったので、それを少しさせていただく。

まず徐晃の説明で一部訂正。

官渡の戦いで徐晃が一騎討ちで負けたのは文醜ではなく顔良でした。

どちらにせよ本作の徐晃は恋姫の顔良や文醜には負けない位の強さにします。

そして徐庶の説明の捕捉。

徐庶の偽名『単福』は演義作者の間違いと書きました。

正史『諸葛亮伝』の注に引かれている『魏略』によると徐庶の本名は徐福だが『魏略』の徐庶に関する記述に「もと単家（うだつの上がらない家柄）の子」というのを『単という家の子』である「福」と解釈してしまい単福と誤解してしまったようです。

あと、本作の徐庶が単福と名乗ってないのは演義では友人の仇討ちで殺人罪の役人に捕まり、友人の助けで牢から逃げ出して偽名を使っていたが本作ではしていないことにしています。

俺の徐庶のイメージは諸葛亮や鳳統みたいな女の子だから……人殺しは認めん！！

まぁそんな感じで今回の後書きとさせてもらおう。

次回は何を話そうか……未定です。

～初陣～（前書き）

久しぶりの投稿です。

文章力のなさにマジ泣けてくる……。

先の話ばっか頭に浮かんで序盤の話の細かい部分に手間取る自分に苛立ちます。

～初陣～

村人Ｄ「来たぞ！！盗賊の集団が見えてきた！」

村の櫓から辺りを監視していた村人から報告が入った。

徐晃「それでは皆さん！これより盗賊を迎撃します！
　相手は獣同然の烏合の衆です。情けは無用！皆さんの力でこの村を守り抜きましょう！」

村人達「おう！！！」

徐晃が率いた村人４０人が出ていき、盗賊を迎え撃つ体勢をとる。

～盗賊視点～

盗賊Ａ「おい！村が見えたぞ！」

盗賊Ｂ「ヒャッハ～♪略奪だ～！！」

厳政「奪える物は全部奪え！！金、食料、女！男はいらねぇ、殺し

ちまいな！！」

盗賊団の賊将、厳政が大声をあげる。

盗賊Ｃ「お頭～！前方に何やら人だかりがありますぜ！」

厳政「あぁ？なんだと？」

見ると村人と思われる集団が武器を構え、こちらの進行を遮ろうとしている。

厳政「けっ、俺達とやり合うって訳か。あんだけの人数で勝てると思ってんのかよ？」

盗賊Ｄ「お頭、どうしますか？」

厳政「当然、皆殺しだ！まずは騎馬の連中で突っ込み撹乱させろ。行け！！」

厳政の掛け声で馬に乗った盗賊が徐晃達に向かって走り出す。

それを徐庶は櫓から確認すると直ちに銅鑼を鳴らす。

徐庶「今です！こちらも馬を出して下さい！！」

合図と同時に徐晃達の後方から馬に乗った村人が１０名ずつ、左右から現れた。

そして突撃する盗賊の騎馬と徐晃達の間を交差するように駆け抜ける。

すると……

盗賊Ａ「お、おい！どうしたってんだ！？」

盗賊Ｂ「う、馬が言うこと聞かねぇぞ！」

盗賊Ｃ「よせ、やめろ！お、落ちる～！！」

盗賊達が乗る馬は村人が乗っていた馬を追いかけようとして進路を急に変えた。

それを戻そうと強引に手綱を引っ張るが暴れる馬を押さえられず、バランスを崩した盗賊達が次々と落馬する。

徐晃「よし、先鋒が崩れた……構え！……放てぇ！！」

徐晃の掛け声で弓を構えた村人が次々と矢を放つ。

落馬により立て直す暇もない盗賊の無防備な身体に容赦なく矢が突き刺さる。

厳政「おのれぇ！雄馬が雌馬を追う習性を利用したな！！」

盗賊D「お頭、騎馬の連中がほぼ壊滅状態です！」

厳政「まだ数ではこっちが上回ってるんだ。構わねぇ、このまま進め！」

死体となった仲間を踏み越え盗賊の本隊が突撃する。

徐晃「我が名は徐公明！悪を断つ剣なり！！！いざ、参る！！！」

遂に盗賊との戦闘が始まった。

村人達には事前に盗賊達との戦闘では『スリーマンセル』という3人1組で戦う方法を教えた。

1人が盾と短剣を装備し敵の攻撃を盾で防御する。
その隙に槍を持っている2人目が攻撃を仕掛ける。
3人目は長剣を持ち、辺りを警戒したり2人目に加勢したりと臨機応変に行動してもらう。

これで少なくとも1対1で戦うより生存率は高くなるだろう。

そして、何よりも……。

ブゥン！　ザシュ！

盗賊E「グハァ！」
盗賊F「ぎゃああ！」

ドサッ

徐晃「不義不忠の輩、この私が成敗いたす！！」

圧倒的な強さを見せる徐晃の力は盗賊達にとって脅威の存在となっている。

厳政「どうした！？雑魚数十人と女に何足止めされているんだ！？」

盗賊Ｇ「ですがあの女、予想以上の強者で……。」

厳政「だったら女は後回しだ。他の連中を殺れ！」

そう厳政が指示したと同時に…。

ジャーン！ジャーン！

また銅鑼が激しい鳴り響く。

盗賊Ｊ「お頭～！大変です！！」

厳政「どうした！？」

盗賊Ｊ「そ、それが俺達の左右の後方から……。」

～盗賊の右後方～

桃香「今だよ、私に続いて！みんなの力で盗賊達から村を守り抜こ

う！！」

村人「おおおおぅ！！！！」

～盗賊の左後方～

自警団Ａ「よし、行くぞ！いますぐ戦っている連中に加勢して奴等をやっつけるぞ！！」

村人「おおおおぅ！！！！」

それぞれ３０人を引き連れて徐晃達と挟撃を仕掛ける。

厳政「な、なんだあいつら……一体どこから現れたんだ！？」

実は盗賊達が進んできた道にはいくつか枝分かれに道が存在する。

桃香達はその道を木の枝や葉を使って身を隠し、銅鑼の合図と同時に盗賊達の後方から奇襲したのだ。

前方に４０、左右の後方にそれぞれ３０の合計１００人で挟み撃ち。
村人がこれ程までに用意周到であるとは想像出来るはずもなく盗賊達は一気に混乱した。

盗賊Ｄ「お、お頭……これ以上戦うと、完全に退路がなくなりますぜ！」

厳政「くそ！仕方ねぇ……野郎共！一度退くぞ！」

厳政達は自分達が来た道に撤退していく。

しかし…

盗賊Ｊ「ん？……何だアレ？」

盗賊Ｄ「誰かが……こっちに来るぞ！」

盗賊達がやって来た方向から誰かが１人、馬に乗ってこちらへ近づいてくる。

もう既に姜維達の考えた作戦は最終段階に移っていたのだ。
時は盗賊達が襲撃する２刻前にさかのぼる。

～村長の屋敷～

桃香「絶対駄目！そんなの危険過ぎるよ！」

「けど、それが最善策なんだよ。盗賊達を率いている隊長格を倒せば早期に決着がつく。そうだろ、徐庶？」

徐庶「確かにそうですね。指揮官を倒す事は相手の士気に大きな影響を与えます。
ですが、集団を纏める人物となればそれなりの実力をもっているのも事実です。」

桃香「その役目を迅君1人がやらなくても……。」

徐晃「やはり、ここは私も一緒に…。」

「いや、徐晃はそのままでいい。俺よりも村人達の統率が上手いから敵の突撃を正面で受け止めてくれ。」

徐晃「ですが……。」

なかなか桃香達は納得してくない。どうにかして俺1人でも大丈夫

だというのを証明しないと……。

「そうだなぁ……徐晃、試しにこれ持ってくれないか？」

そう言って俺は自分の武器を机に置く。

徐晃「え？これを……ですか？」

徐晃は言われるがまま持ってみようとするが……。

徐晃「……！！」

桃香「どうしたんですか徐晃さん？」

徐晃「持て……ない？こんなに重かったなんて……。」

片手では無理だった徐晃が両手で持ってみるも俺の武器は動かない。

自警団Ａ「おいおい、こんな細い棒を持てないって馬鹿言うなよ…。」

徐晃に代わって持とうとするが姜維の武器は一向に机から浮くどころか動く気配もない。

他の自警団も手を貸し、結局６人がかりでやっても微動だにしなかった。

自警団Ａ「はぁ…はぁ…あんた……一体なんだよこれ。」

「家の蔵にあった物なんだが俺以外誰も持てないらしい。それを俺は……あらよっと。」

そう言って俺は片手で自分の得物を持ち、カンフーアクションのように回転させる。

桃香「（これって……占い師さんの……。）」

「こいつの名は『如意金箍棒』。俺が名付け親だがな……っとまぁこんなもんだ。どうだ？これじゃあ納得出来ないか？」

自警団Ａ「すっすげぇ、あんたやっぱ凄いな！」

自警団B「今回の作戦といい、今のといい、一体何者なんだよあんた？」

「ふっ……ただの旅人だ。さて、俺は準備に取り掛かるから先に行かせてもらうぜ。」

そう言い、俺は外で待たせていた飛電に跨がり所定の位置を目指し駆けていった。

そして俺は今、単騎で盗賊の集団へ向け突撃している。

目標は賊将『厳政』ただ1人

「『天水の麒麟児』姜伯約、目標を駆逐する！！」

厳政「1人で突撃するとは馬鹿な奴め！おい！アイツを殺れば逃げ道はあるぞ。さっさと片付けろ！！」

盗賊共は剣や槍を振りかざし俺に襲い掛かる……が。

「邪魔だ！！！」

飛電の速度を全く緩めずにそのままの勢いで武器を振り回し、近付く賊をなぎ倒していく。

肩を砕き、肋骨をへし折り、頭蓋骨を粉砕し、厳政に狙いを定め一気に迫りくる。

厳政「な、なんだアイツ……俺を狙ってるのか？……おい、お前ら！早くアイツを射ち殺せ！！」

厳政の周りにいる賊が弓を構え次々と矢を放つ。

「駆けろ飛電！その名の如く！」

飛電「ヒヒーン！！」

飛電は更に加速し、尚且つ矢の軌道を読み取り矢が飛んで来ない隙間を掻い潜った。

厳政「なっ！……あれだけ射って掠りもしたいだと！？」

「勝負だ！厳政！！」

俺が挑発する。

厳政「小癪な……青二才が調子にのるなぁぁぁ！！」

厳政は剣を構え馬を走らせ姜維に向かって突撃する。

厳政「死ねぇ！！」

そのままの勢いで俺の顔めがけて剣を突きだす。

「でやぁぁぁぁぁ！！！」

顔を最小限動かし、間一髪で剣を避けて如意金箍棒を厳政の心臓に突き刺す。

ドス！！

突き刺す瞬間に回転をかけた俺の一撃は見事に厳政の心臓を突き破った。

俺は一度、如意棒を手放しそのまま厳政とすれ違う。

厳政「ぐっ……がはぁ…」

厳政は持っていた剣を落とし、馬から崩れるように地面に落下し息を引き取った。

「貴様らの賊将　厳政！この姜維伯約が討ち取った！！」

この一言で盗賊達の敗北は確定した。

盗賊K「厳政のお頭が……負けただと？」

盗賊I「そんな……嘘だろ……？」

盗賊L「もう無理だ！俺は逃げるぜ！！」

盗賊達「うわぁぁぁぁぁ！！！」

盗賊達は俺が現れた道を我先にと逃げ出していく。

しばらく村人達が互いに顔を見合っていた。

俺は厳政の亡骸から如意棒を抜き取り天に掲げて叫んだ。

「俺達の……勝ちだ！」

一瞬の沈黙……そして

村人達「わあぁぁぁぁぁぁぁ！」

村人達の歓声が辺りに響きわたる。

ある者は戦い抜いた友と抱き合い、ある者は子供のように跳び跳ねて喜びを表現し、ある者は思わず泣き崩れてしまった。

飛電から降りた俺がそんな光景を眺めていると……。

桃香「迅君ーーー！！」

「ん？……この声は……。」

聞き覚えのある声に反応し振り返ると桃色の髪をなびかせながら桃香が駆け寄って来た。

「桃香。無事だった…ぐはぁ！」

そしてそのまま俺に抱き付いてきた。

桃香「良かった……本当に無事で良かった。
　迅君が敵の中に突撃して……そのまま姿が見えなくなって私、心配で……でも、もう一度迅君の声が聞こえた時は……本当に…。」

桃香は目に涙を浮かべている。周りから見ればとても感動的な場面だと思うが、実際は複雑だ。

桃香は首に両腕をまわし、かなり強く抱き締めているので身動きがとれないし、桃香の胸に顔が埋まり呼吸困難に陥っている。

「とっ桃香……息が……出来ない…。」

桃香「あっ！ご、ごめん！大丈夫？」

慌て桃香は身体を離す。

「大丈夫…だ。ふぅ～全く、桃香は心配性だな。俺が信用出来ないのか？」

桃香「そうじゃないけど……。」

「それに、こんな盗賊相手に苦戦してたら桃香の護衛なんか勤まらないよ。」

桃香「うぅ……。迅君ひどいよ～。」

徐晃「姜維さん！劉備さん！」

そうやって桃香をからかっていると徐晃も駆け付けてきた。

徐晃「2人共、ご無事でしたか。」

「まぁな。」

桃香「徐晃さんも無事だったんですね！」

徐晃「私は大丈夫でしたが、村の方が幾人か……誠に遺憾です。」

「そんな顔をするなよ。徐晃の的確な指示とその力があったお陰で村は救われたんだからな。」

徐晃「いえ、一番の功労者は姜維さんですよ。敵陣をたった1人で突破していき、敵将をいとも容易く討ち取ってしまった。　その武勇……感服いたします。」

「いや、そんな褒めたって何も出ないから……。」

その時、自警団の隊長が俺の名前を呼んだ。

「どうした？」

自警団A「あぁ……賊が逃げて行った方角から、こっちに向かって軍隊らしき集団が近付いているんだ。」

「軍隊だと……？」

徐晃「また奴等なのでしょうか…？」

「まだ断定は出来ないな、俺が行ってみよう。あんたは村人達を村の中に誘導してくれ。」

自警団Ａ「分かった。」

桃香「私も……行っていい？」

……今の桃香は譲らないだろうな。

「分かった。離れるなよ。」

そう言って桃香と一緒に軍隊の方へ向かう。

すると直ぐに軍旗が見え、桃香はその旗に書かれている文字を口に出した。

桃香「『劉』の……牙門旗？」

～初陣～（後書き）

大変遅れました……。

最近の暑さに自分のヤル気も削られっぱなしです。

もう一度気合いを入れてやっていこうと思う！

今回はオリキャラ2名の能力値を公開します。

まずは徐晃

統率7
武力5
知謀4
政治3
人望5

演義の徐晃は敗戦知らずの勇将なのでこんな感じ。

武力が5なのは始めは顔良に負けた経験があるので敢えて5にしました。

けど最終的に、関羽や趙雲達と互角にする予定。

続いて徐庶

統率６
武力２
知謀７
政治５
人望５

徐庶はどちらかというと軍事担当なので少し差をつけました。

演義では魏に降りた後、赤壁の戦いに従軍し周瑜達の作戦を見抜きいち早く軍を抜けて姿を消しています。

演義の創作ではありますが、本作では諸葛亮にも負けず劣らずの軍師にしています。

次回は早めの投稿目指して頑張ります！！

～決意と新たな道～（前書き）

まずは一言。

女子サッカーW杯『なでしこJAPAN』優勝おめでとう！！！

テレビの前で歴史的瞬間を目撃した自分は言葉が出ませんでした。

諦めない信念を見せつけられました。

……俺も本作を完結出来るまで諦めません！

～決意と新たな道～

俺は桃香と一緒に様子を見に行った先で劉の牙門旗を掲げた部隊を見つけた。

部隊の人達も俺達を確認したのか、数人の兵士達が馬に跨がりやって来る。

兵士A「お二方はこちらの方角から？」

「あぁ、この先の村からな。」

兵士A「この先の…？そ、それでは盗賊に襲撃されたのではありませんか！？」

桃香「ついさっき襲われましたけど、村人の皆さんと協力して撃退しました！」

兵士A「なんと！？信じられん。報告では盗賊の規模は３００と聞いてるぞ。」

兵士B「どうする？嘘はついてないみたいだが……。」

兵士C「さっき捕まえた連中がそうじゃないのか？」

兵士３人は顔を見合せ相談している。

桃香「悪い人達……じゃないよね？」

桃香は俺に聞いてくる。

「大丈夫だ。おそらく掲げている旗からして……」

？「そこの２人がどうかしたのかしら？」

兵士達の後ろから馬に乗った女性が部隊を引き連れてきた。

風格からしておそらくこの軍の将だろう。

兵士３人「劉表様！」

劉表と呼ばれた女性は俺達に目を向ける。

劉表「う～ん。さっきの盗賊とは随分と格好が違うし関係ないみたいだけど……どうかしたの？」

兵士Ａ「それが、この先の村が盗賊に襲われたのを村人達と協力して撃退したとこの２人が……。」

劉表「そう……私は荊州刺史の劉表。盗賊の被害報告をうけてやって来たわ。貴方達は？」

桃香「私の名前は劉備　字は玄徳です。」

「俺は姜維　字は伯約だ。」

劉表「劉備、姜維。今の話は本当なの？」

「全部本当だ。俺や桃香、それに村の人達と協力してな。」

劉表「色々と聞きたいことがあるけど……詳しい話は村に行ってからにしましょう。」

俺と桃香は劉表軍と一緒に村へ戻り劉表を村長の屋敷へ案内した。

劉表が村長から話を聞いている間、俺と桃香は徐晃達と合流し現在は徐庶宅の居間にいる。

徐晃「まさか荊州刺史が自ら出向いてくるなんて…。」

徐庶「劉表さんが治める荊州は他の地方よりも治安がかなり良いですからね。
君主としても将としても劉表さんの評判はかなり高いですよ。」

桃香「でも、そんな凄い人が統治していても盗賊の被害は絶えないんだね……。」

「盗賊達は金や食料を目当てに村や街を襲う。
悪政によって貧困した村よりも善政で豊かな村を狙う方が得るものが大きいからな。」

桃香「迅君……早く御使いの使者を見つけないとね。」

「あぁ……そうだな。」

久しぶりに聞いたな御使いの使者……。
そろそろ言うべきなのだろうか。

徐庶「そういえばお2人が旅をしている目的はなんですか？」

徐晃「どちらも出身地は違うと言ってましたが、どのような経緯が

あるのですか？」

2人とは今日まで色々と自分達の事を話していたが俺達が旅をする目的はあえて伏せていた。

まぁ、占い師の予言を信じて旅してますとはハッキリ言う勇気がなかったんだけど……。

桃香「迅君、話してもいいよね？」

「ん～……ここまできたら話しておくか。
2人にはかなり世話になったしな。」

桃香は2人にこれまで俺達が旅をしてきた理由や経緯を説明した。

2人とも口を挟むことなく神妙な顔付きで聞いていた。

徐晃「天の御使いの使者……ですか。」

徐庶「その人が劉備さんを導いて下さるんですね。
けど、御使いではなくその使者をお探しになるなんて……。」

桃香「私1人じゃなにも出来ないし、それが本当なら私はこの大陸

を救いたいの。
皆が笑顔でいられる平和な世界を……。」

そうだ……もうすぐ大陸の民衆を巻き込んだ大規模な反乱『黄巾の乱』が起きるはず。

それまでには桃香の理想を目指す為に何処かで旗揚げするか軍に所属でもしていないと理想から遠ざかるばかりだ。

こうしていつまでもいるかも分からない御使いの使者を探している訳にもいかない。

だとしたら……今が好機か。

俺は占い師が言った御使いの使者の条件に幾つか当てはまってはいるが自分がそうだという自信はない。

けど、俺にはこの世界にも多少なりとも通用する三国志の知識が山程ある。桃香を守る力もある。嘘かもしれないけどここは俺が前に桃香に言った通り導くしかない！

俺は覚悟を決めた。

「えっと……桃香。ちょっといいか？2人も聞いてくれ。」

徐晃「？」

徐庶「？」

桃香「どうしたの迅君？」

今までにない俺の緊迫した表情に3人も息を呑む。

「ま、まずは……3人に謝らないといけない事がある……。」

俺は一息ついて

「それは俺の素性について……少し隠してることがあるんだ。」

桃香「素性？」

徐晃「それは一体……？」

徐庶「偽名とか…身分の事ですか？」

「そんな事じゃない。もっと俺自身の本質というか……俺の正体についてみたいなことだ。」

さて、３人はどういう反応をとるんだろな。

「実は俺……天の御使いの使者なんだ……と思う。」

俺はその言葉を皮切りに自分の本当の素性について話した。

本名は高嶺　迅。

今の時代から千何百年後の世界で生活していたごく普通の高校生であり、ひょんな事から事故で死んだと思ったら、今の時代で姜維として生まれ変わったこと等々……取り敢えず全部打ち明けた。

桃香達の反応といえば、何だろう……教祖を崇める信者みたいに俺を讃えているような感じというべきか……。

「ま、まぁ偶然占い師の予言と重なる部分があるだけで使者とは言い切れないし、第一俺の話を信じてもらえるとは思ってな」

桃香「す、凄いよ迅君！！！」

桃香は目を輝かせながら俺に言った。

「えっ、ちょっ、桃香！？い、今の話……信じるてくれるのか？」

桃香「当然だよ！迅君が私に嘘つく訳ないじゃない！」

随分と言い切ってくれるな…。

桃香「私達とは別の世界から転生したんでしょ！？
やっぱり迅君は絶対天の御使いの使者だよ！！」

ハハ……参ったなこりゃ。

桃香「それにね、初めて出会った時から思う事があったんだよ？」

「な、何？」

桃香「迅君が私に言ってくれた言葉。『たとえ御使いの使者が見つからなくても、俺が君を導いてやるぜ！』みたいな事、言ったの覚えてる？」

「あ～、言ったなそんなこと。」

桃香「その時からかな。迅君と一緒に旅をしていても、心の何処かでは『本当に使者が見つからなくても、迅君が一緒なら私の理想を叶えられるかも』って思ったのは……。」

桃香は顔を少し赤らめ俺の右手を両手で包みこんだ。

桃香「あの言葉……信じてもいいんだよね？」

桃香が俺の目をじっと見つめる。

「あぁ。全てをうち明かした俺をそれでも信じてくれた桃香を……桃香の理想を俺は絶対に叶えてみせる！」

俺もそれに応えるように見つめ返す。

桃香「迅君……。」

桃香はそのまま俺に抱き付く。今回は前と違ってゆっくり優しく包み込むように。

俺もそれに応えよう桃香の背中に手を回したところで……。

徐晃「……（じー）。」
徐庶「ふわわわわわ…。」

2人と目が合ってしまった。

徐晃「コホン！」

徐晃はあえて声を大きめにだす。

ふと我に返った桃香が尋常じゃない早さで俺から離れた。
顔は茹でタコのように真っ赤だ。

徐晃「まぁ、その……大変水を差すようで悪いとは思いますが、そういうのはもっと……時と場所をお考えになるのがよろしいかと……。」

徐庶「（コクコク）」

徐晃も顔が少し赤く、徐庶は振り袖の部分で顔を隠しながら頷く。

桃香「うぅ……。」

「……すいません。」

徐晃「そ、それよりも先程のお話についてですが！」

徐晃が強引に話題を戻す。

徐晃「私も姜維さんの話を聞いた限りでは嘘は1つもないようにとれました。
となれば……姜維さんが仰った出来事が起こるのも事実なのですか？」

「まぁ色々と違う点があるが、大まかな歴史の流れは変わらないと思う。」

徐庶「民衆の大暴動、後漢王朝の没落、そして……群雄割拠。」

「そうなれば必然的に多くの人の命が失われる。
だから俺は今から桃香と共に何処かで旗揚げしようと思っている。」

桃香「はたあげ？」

「簡単にいえば何処かで県令や太守の役職に就くって事かな。
そこで軍を持って戦いに備えておく……まずはそこまでが目標かな。」

徐庶「しかし、役職に就くと言ってもお2人は地位や名声等を何も持っていない身。
太守になるどころか、仕官出来るかも怪しいですよ……。」

確かに俺達にはお金も地位も名誉もない。

これじゃ無理か……。

どの世界でも人生そう上手くはいかないものだよな。

「う～ん。近辺の賊を倒して少しでも名声が太守とかの耳に入いれば可能性はあるんだけど……。」

さてさて、どうしたものか……。

劉表「名声？私の耳にはとっくに入ってるけど？」

その声と同時に数名の兵士を連れて徐庶宅へ入ってきたのは荊州の刺史　劉表であった。

桃香「りゅ、劉表さん！？」

「どうして此処に？」

劉表「村長さんとのお話は終わったけど、今度は貴方達に用事が少しあってね。

この家にいるって聞いたから訪ねてきたの。勿論、貴方の親には了承済みよ徐庶ちゃん♪」

徐庶「そ、そうですか…。」

「それで、俺達に用件って何でしょうか？」

劉表「あら？さっきの私の最初の言葉を聞いてれば、少しは察してくれると思ったのだけど…。」

最初の言葉？

……！！

「もしかして……聞いてたんですか？」

劉表「盗み聞きは趣味じゃないけど面白そうな内容だったからね♪
途中からだったけど、何となく話は分かったわ。」

つまり、俺の素性は聞いてなかったか……良かった～。

桃香「えっと……つまりどういうことですか？」

劉表「貴方達の今回の活躍を聞いてとても興味が湧いたの。このまま在野でいさせるなんて勿体ないわ……劉備、姜維、徐晃、徐庶」

劉表は1人ずつ名前を呼び……。

劉表「私の下で働いてみない？」
俺達を刺史自らが抜擢してくれた……だと！？

渡りに船とはこういう事を言うのかと俺は改めて思った。

桃香「えぇぇぇ！？ど、どうしよう！？　私達いきなり仕官求められたよ迅君！！」

「桃香、少し落ち着け！まずは深呼吸するんだ……で、本当にいいんですか劉表さん？」

劉表「いいもなにも私が治める州で私が守るべき民の命を貴方達は救ってくれた。
　そんな恩人に私が何もしない訳にはいかないわ。そして貴方達は何処かで旗揚げ、もしくは仕官を求めている。
　それなら恩返しはそれで決まりじゃない♪」

桃香「で、でもそれって劉表さんの家来になるってことですよね？」

劉表「家来って……。まぁそれでもいいし、客将という形でも構わないわ。

貴方達の活躍次第では色々と援助してあげてもいいのよ？
さて、そろそろ返事が聞きたいんだけど……どうかしら？」

援助……俺達の旗揚げを支援してくれるっていうのか？

どれだけお人好しだよ劉表さん。

史実での優柔不断で野心をなくしたダメ君主とはとても思えない……。

これは普通に考えれば受け入れるのは当然だ。けど、問題は俺個人だけの話ではないことだ。

「待ってくれ。確かに仕官したいと言ったのは俺だけどそれは徐晃や徐庶には関係が……。」

徐晃「お待ち下さい！」
徐庶「待って下さい！」

え？

徐晃と徐庶の声が聞こえ振り返ると2人共、俺と桃香の前に跪く姿勢でいた。

桃香「えっ、徐晃さん、徐庶ちゃんいきなりどうしたの！？」

徐晃「私の旅の目的は仕えるべき相応しい人物に出会う事です。
ついに……私は出会いました。劉備さんの掲げる理想への想い、姜維さんの決意と覚悟、そして互いに呼応する絶大なる信頼、その1つ1つが私の心に響きました。
古人は名君と遭遇しないことを嘆きましたが、私は幸運にも今それに遭遇している。お2人の為、私は功績をあげ自己の力をお二人に尽そうと思います！
我が名は徐晃　字は公明　　真名は神楽(かぐら)。私は劉備様の理想の為に死力を尽くしこの身を捧げる事をここに誓います。」

徐庶「私が水鏡先生の所で勉強したのも全て国の行く末を思っての事。
徐晃さんと同じように私の心にも2人の信念を感じ、また同時に2人と共に理想を目指したいと思いました。私の力でお二人の道を照らしたいです！
私の名前は徐庶　字は元直　真名は藍里(あいり)です。私も徐晃さんと共に劉備様に忠誠を誓います。」

どうやら2人とも本気のようだ。

本音を言ってしまえば、俺はこの2人をどうにかして仲間にしようと少し前から考えていた。

だってあの徐晃と徐庶だぜ？

三国志に名を馳せる人物と知り合いになったんだから誘って損はまずあり得ない。

その２人が今、桃香に忠誠を誓っている。

ここまで都合のいい展開があっていいんだろうか？

逆に後が恐い……。

桃香「そんな堅苦しい言葉はやめよう。今まで通り接してくれると嬉しいな。
　私も２人の気持ちに応えられるように頑張るよ！　私の真名は桃香。よろしくね神楽さん　藍里ちゃん♪」

「桃香もこう言ってるし俺も大歓迎だ！　よろしくな２人とも！俺の事も迅って呼んでくれよな！」

神楽「よろしくお願いします。桃香様、迅さん。」

藍里「期待を裏切らないように精一杯頑張ります！」

劉表「答えは決まったようね。　聞かせてもらうわよ劉玄徳。」

桃香「はい！慎んでお受けいたします！劉表さん♪」

劉表「フフッ……よろしくね劉備♪」

桃香と劉表は互いに握手を交わした。

いまだ謎だらけの天の御使いの存在と残り3人の御使いの使者の正体……

この先どういう事が起こるのか……想像もつかないけど、今はただ前に進んでいこう

仲間と共に

～決意と新たな道～（後書き）

本作も１つの区切りに入りました。

桃香との２人旅を終え、次回からは新しい仲間と共に本作のオリキャラ劉表の下で本格的に働きます。

仲間もまだまだ増やす予定ですし、投稿する自分自身も姜維とどうゆう絡みにしようか楽しみです♪

さて、今回からキャラの能力値の表示方法を変えようと思います。

ただ単に数字の値からアルファベットの表示にするだけですが…。

７段階は変えずに一番上からＳＳ＋＜ＳＳ＜Ｓ＜ＡＡ＜Ａ＜Ｂ＜Ｃとします。

分かりずらくてすいません……。

次回の後書きで今までの登場人物の能力値をもう一度公開しようと思います！

～初めてのお仕事！（説明編）～（前書き）

アナログから地デジへ！

皆さん地デジの準備は大丈夫でしたね？

さて、劉表軍に仕官する事になった劉備一行。

一体、彼女達に任される最初の仕事とは！？

～初めてのお仕事！（説明編）～

劉表の下で仕える事を約束した俺達はその後、村人達が総出で盗賊退治の感謝のお礼として催してくれた宴に参加した。

劉表も宴に参加するのを許してくれて、俺達４人はその日の夜は村人達と大いに盛り上がった。

翌日には村を劉表軍と共に出発し、３日後に劉表の本拠地を構える『襄陽』に到着した。

～襄陽城　玉座の間～

「到着して早々、ここに来るようにと劉表は言っていたが一体なんだろうな？」

桃香「もしかして、早速お仕事任されるのかな？」

「軍の中での仕事に関しては俺達は素人同然。いきなり重要な仕事は任せないと思うが……で、その劉表本人は何処だ？」

藍里「どうやら……劉表さんはまだ来ていないみたいですね。」

神楽「一度、お着替えになられてから来るようですよ。
　今回は君主として私達と立ち会いますから身だしなみを整えているのでしょう。」

俺達が玉座の間に到着してから五分くらい経過した時、着替えを終えた劉表が数人の将や文官を引き連れてやって来た。

劉表「待たせてごめんなさい。この服見た目はいいのだけれど着るのに少し時間が掛かるのよね～。」

そう言いながら劉表は玉座に腰掛ける。

劉表「さて、全員いるみたいだし……始めましょうか。
　今から私が言う事は２つ。貴方達のこれからの立場、それと明日からしてもらう大事な仕事についての大まかな説明よ。」

劉表はその２つについて分かりやすく説明してくれた。
まず１つ目の俺達の立場について

劉表は最初、俺達の能力を高く評価していて、一部隊を率いて戦ってくれる将に抜擢……とまで考えてくれていた。

その事を村から襄陽に着くまでの間に早馬を出し、城にいる自分の家臣の将に伝えたところ、大半の人数が反対。

仕方なく今俺達は客将という立場に置かれる事になっている。

これは仕方ないだろう。
いきなり何処の馬の骨とも分からない奴が急に自分達と対等の立場で部隊を纏めていたら、長年かけて将の立場に登り詰めた自分の努力が何だったんだ！って言いたくもなる。

劉表本人曰く、

「貴方達は私の所にいる部下の八割より全然有能なのよ！？
反対意見出してる奴等がその八割よ。そんな連中が貴方達を客将扱いにしろだなんて……どうかしてるわ！」

と若干キレていた……。

２つ目は俺達の仕事について

今回の州境付近での盗賊被害はここ最近増えてきているらしい。

州の内陸部に関しては劉表自身が目を光らせているから賊の被害は

かなり少ないという。

となれば後は他方からやってくる拠点をもたないような盗賊達の撃退を徹底する必要がある訳で、その案として襄陽の兵や将を各州境の拠点に振り分ける事にした。

これも１つ目同様に早馬を出して文官達に提案し、働きかけたらしい。

さすが劉表さん……「江夏の八俊」と称されるだけある。

しかし、そうなれば本拠地襄陽の守りが薄くなる。さすがに賊の被害はゼロではないのでこれでは不味い。

そこで俺達の出番である。
劉表は俺達に襄陽を含めたここ一帯で義勇兵の募集をし、そこで集まった兵を俺達が将として纏めさせ、賊の襲撃時の防衛にあたらせようと考えたのだ。

勿論、いざというときは近くの郡から救援部隊を送るし、細かい管理等も劉表の部下がサポートしてくれるという。

「い、意外に大役だな…俺達。」

桃香「いきなり義勇兵の募集だなんて……何をどうすればいいのか分からない事だらけだよ～。」

劉表「心配しないで。何も最初から全部貴方達にやらせるなんて言ってないわ。
　途中までは彼等が教えてくれるから、そこから貴方達が工夫を凝らしてやって頂戴。」

そう言って劉表が後ろにいる将と文官を手招きして前にだした。

劉表「明日から貴方達の指導をする私の部下よ。2人はこの件に関して承諾済みだから協力して義勇兵を集めなさい。」

？「桜香様のご命令とあらば！拙者は文仲業。軍や兵、戦については拙者に任せるがいい！」

？「それでは内政面は私がお手伝いしましょう。私は向朗。皆さん、これからどうぞよろしく。」

藍里「あっ……菖蒲さん！」

向朗「久しぶりね、藍里。」

藍里の反応に向朗は小さく手を振って応える。

劉表「顔見知りもいるようなら尚更安心ね。それじゃあ最後に私から個人的に1つ。」

玉座から立ち上がった劉表が俺達の前まで来て

劉表「貴方達に私の真名を預けるわ。今度からは気軽に桜香(おうか)って呼ぶこと♪いいわね？」

桃香「はい！今日からよろしくお願いしますね。桜香さん♪」

その後、俺達も真名を劉表に預けて一旦各自が使う部屋に案内された。

俺は1人部屋の寝台に腰掛け明日から世話になる人物の情報を頭から引き出していた。

文仲業……たしか名が聘だから文聘か。

史実では劉表軍の将で江夏を守っていた。

けど曹操が攻めてきて最終的に降伏。その後も江夏を守り孫権軍の侵攻を防いでいた……だったよな？

劉表に対する忠誠心が高いことでも有名だったし良い指導者なんだろう。

向朗は史実でも劉表軍の文官として活躍し劉備に仕えてからもかなり高く評価されていた人物だ。

藍里とは同じ私塾の先輩でおそらく今は藍里の部屋で今までの事を話しているのだろう。

桜香だけでなく藍里からの信頼も厚いから何も心配はいらないな。

そこから俺の考えはこれからの事に変更した。

「（劉備が劉表に身を寄せるのは群雄割拠に入ってからだ。
それまでは軍勢も少なく戦で拠点を奪われたりと悲惨な目に遭っていたが、何とか早い段階で劉表の下で客将になれたか……。）」

「（しかも神楽や藍里といった名将や軍師が仲間になってくれた。少しずつだけど桃香の理想に着実に近づいているはずだ。今回の仕事次第では、きっと黄巾の乱の時には一軍を担う将になれるチャン

スが来るかもしれないな！）」

「よし！桃香の為にも頑張らないとな！！」

俺は立ち上がって自分に渇をいれる。

「さて、まずはともあれ城内を一度見て回ってこよう。
いざという時に城の中で迷子になる訳にはいかないしな。」

そう呟きながら扉を開けて部屋を出ようとすると…

ゴン！

桃香「あいたっ！」

押し開きの扉に桃香の頭がぶつかってしまった。

「えっ？…あっ！と、桃香！？悪い！大丈夫か！？」

俺はすぐ部屋の扉を閉め桃香を見る。

桃香「いたた……だ、大丈夫だよ。扉の前に立ってた私も悪いし……。」

桃香はおでこの辺りを擦っている。

「けど、どうして俺の部屋の前になんて…？用があるならノックすればいいのに。」

桃香「……ノック？」

「あぁ、ごめん。俺の元の世界での言葉で扉を軽く叩いて中の人に合図をする事だ。こんな風にね。」

俺は自分の部屋の扉を軽くノックする

桃香「それがノックなんだ。また天の世界の言葉教えてもらっちゃった～♪」

俺は桃香達に本当の俺の話をしてから前世？の言葉を時々使ってしまうようになった。

他の人と話す時は言わないようにしている。この世界に十何年生き

てるからそれにも苦労はしていない。

けど自分の素性を知っている桃香や神楽、藍里の前だと気が緩んで今みたいに言ってしまうのだ。

その度にどういう意味か説明してはいるが、中には説明に困る言葉もあるのでこっちで苦労してるのだが……。

「で、部屋の前にいた理由は？」桃香「えっと、私まだここに来て間もないから…城の中の事よく分からないし…迅君に案内して貰おうと思って部屋の前まで来たの。」

「ふむふむ…それで？」

桃香「扉に手を掛けようとしたら中から迅君が……」

「出てきたのか。丁度同時で動いてたって訳か…。」

桃香「え？あ、そ、そうだよ！うん、そうそう！
（『私の為に』なんて言われて照れてたんだけど……内緒にしとこ♪）」

「けど、俺が案内って、俺も初めてここに来たからそれは出来ないよ。」

桃香「あっ……そうだった～。」

「う～ん。それじゃあ一緒に見て回るか？俺もそうしようと思ってたし。」

桃香「うん。一緒に行こ♪」

俺は桃香と並んで歩き出す。

この先何が起こるなんて分からない。

もしかしたら史実のような戦乱の世にならないかもしれない……。

けど、もしもの時に何も出来なかったなんて後悔だけはしなくない。

それを胸に刻み…今は前に進もう。

～初めてのお仕事！（説明編）～（後書き）

前回のとおり、改変した能力値でもう一度登場キャラ（新キャラあり）の能力を公開します！

姜維

統率ＳＳ
武力ＳＳ
知謀ＡＡ
政治ＡＡ
人望ＳＳ

政治　人望の能力を変更しました。

劉備（桃香）

統率Ａ
武力Ｂ
知謀Ｂ
政治Ａ
人望ＳＳ

徐晃（神楽）

統率ＳＳ＋
武力Ｓ
知謀ＡＡ
政治ＡＡ
人望Ｓ

政治の能力を変更しました。

徐庶（藍里）

統率ＳＳ
武力Ｂ
知謀ＳＳ＋
政治Ｓ
人望Ｓ

劉表（桜香）

統率ＳＳ
武力Ａ
知謀ＡＡ
政治ＳＳ
人望ＳＳ＋

文聘（？）

統率ＳＳ
武力ＡＡ
知謀Ａ
政治Ａ
人望ＳＳ

向朗（菖蒲）

統率Ｂ
武力Ｂ
知謀Ａ
政治ＳＳ＋
人望ＳＳ

新キャラも増えましたが個人的な説明を後々書くつもりなので今回は能力値の公開だけとなります。

ではまた次回！

～初めてのお仕事！（医者王登場編）～（前書き）

今回から桃香の服装がチェンジします！

まぁ、アニメ版の村人の服装からゲーム版の服装に変わったと思って下さい。

まだまだ駄文ですが、よろしくお願いします！

～初めてのお仕事！（医者王登場編）～

店員Ａ「お二人さん！どうだい？うちの肉まん食ってかないか！？」

店員Ｂ「そこの娘さん！新しい服が入ったけどちょっと試着しない？きっとお似合いよ！」

「あぁ悪い。今は勤務中だからお昼頃にでも食べにくるよ。」

桃香「ありがとうございます♪けどこの服、新調したばかりですから今は大丈夫です。」

俺と桃香は今、城を出て襄陽の街を歩いている。

俺達が劉表の下に来てから既に１週間が過ぎようとしていた。

俺達は桜香に義勇兵を集めるよう言われたが、まずは募兵している事を宣伝する必要があった。

各郡や県に立て札を設置し、それを見た人達が襄陽に集まるまでに

は数週間は掛かる。

その間に俺達は集まるであろう志願者の為の試験や適性検査の準備をしなければならない。

日が経つ毎に襄陽から劉表軍の数百規模の兵が出発していく。

ついでに立て札を設置してくれるらしいので、約2週間後には志願者がここに集まるはずだ。

しかし、その2週間の間、様々な役職で人手が足りない日が続いてしまうことになってしまう。

そんな訳で俺達は劉表軍の兵士の代役として街の警邏を任されている。

神楽と文聘殿は残った兵士と一緒に義勇兵の試験会場の建設中。

藍里は向朗さんの政務を補佐している。

こうやって警邏に街へ出るのも初めてではなく、ここ最近は2日のうち1日は警邏をしている位だ。

桃香「毎日のように街に出ているけど、相変わらず賑やかだね♪」

「しかも、大きな事件もまだ起きていないし、本当にここの治安は大したもんだな。」

実際、俺達が警邏に出てから食い逃げや窃盗、違法店舗の取締りが数件で殆ど事件が起こっていない。

しかも捕まった犯人は他の郡からやってきた浮浪者ばかり。

こうやって安全に暮らせるのも全て桜香が民の事を第一に考え政策をしてきた結果である。

「それにしても、随分と気に入っているみたいだな。その服。」

桃香「えっへへ～♪だってこれ、スッゴく可愛いんだも～ん！」

実は桃香の新調してもらった服は桜香からの贈り物である。

いずれは桃香も一部隊を率いることになるので、上に立つ者として身だしなみはとても重要。

そこで桜香は特別に桃香に似合う服を自らデザインして針子に依頼し桃香にプレゼントしてくれたのだ。

桃香「凄いよね桜香さん。軍事も政も全部こなしているし、街のみんなからも慕われてるなんて…。
私も桜香さんを見習って頑張らないと！」

「確かにそうだけど、時間は沢山あるんだし、焦らずゆっくりとやればいいよ。俺も協力するしさ。」

桃香「うん……ありがとう♪」
男の子A「あ～！お兄ちゃんとお姉ちゃんだ！」
男の子B「兄ちゃん。また肩車してよ！」
女の子「劉備お姉ちゃん！遊ぼ遊ぼ～♪」

俺達を見つけた街の子供達が駆け寄って来た。

「ごめんな、今は俺達仕事の途中なんだ。」

桃香「お昼過ぎたら私達お休みだから、そうしたら遊ぼ。ね？」

桃香は女の子の頭を撫でる。

女の子「うん、約束だよ！」

「どうだ最近、何か変わったことはないか？
もし何かあったら俺達に直ぐ言ってくれよ。」

男の子A「最近変わったこと～？」

男の子B「あっ！僕1つあった！」

1人の男の子が手を挙げる。

桃香「ん？何かな？」

男の子B「最近、この街に変なおじさんがいるらしいよ。」

不審者の情報か…。

「変って……どう変なんだ？」

男の子B「たしか、病気とか怪我で困ってる人がいたらあっという間に治しちゃうんだよ！」

女の子「それ、私も知ってる！
　近所のお婆ちゃん腰が痛い痛いって言ってたけど、そのおじさんに診てもらったら腰の痛みが治ったって！」

桃香「それはつまり……お医者さんって事だよね？」

「直ぐに治すっていうのが気になるな……。その人はまだこの街にいるかな？」

男の子B「多分いるよ。昨日も大声出して診察してたから今日もどこかで診てると思うよ。」

「そうか、ありがとな。」

お礼を言うと子供達は午後に俺達と何して遊ぶか相談しながら駆けていった。

「怪しい医者ねぇ……。ちょっと気になるな。」

桃香「それじゃあ、そのお医者さんを探してみよっか！」

「あぁ。まずは今日、目撃した人がいるか聞き込んでみよう。」

俺達は早速子供達が教えてくれた謎の医者探しを始めた。

聞き込みを始めれば、その医者を目撃した人は多く、どうやらここ最近ではかなり有名人になっているらしい。

俺の頭の中にはとある人物が浮かび、もしその人物であるなら早めに手を打つべきと考えている。

その人物の名は……『張角』

「（張角は黄巾の乱が起こる前に弟達と一緒に各地で病を治していき、太平道の教えを広めていったとされている……。）」

まだ断定は出来ないが時期からみて、その可能性が非常に高い。

「（もし、ここで張角を捕まえれば黄巾の乱が起きるのを未然に防

げるかもしれないな……。）」

焦る気持ちを抑えながら俺達は最後の目撃証言があった場所を目指した。

「ここが最後の目撃場所だな。」

言われた店にたどり着いた俺達だが店内にはおらず、既に立ち去った後であった。

「結局振り出しに戻ったか…。」

桃香「やっぱり2人で探すのにはちょっと無理があったのかな？」

一度、城に戻り桜香に相談して捜索人数を増やそうか考えていた時、とある場所に目がいった。

「なんだ……あの行列は？」

俺の視線の先には、とある一軒家の前に２０人以上の行列が出来ていて、家の入り口には野次馬もできている。

桃香「うわ～！たくさん人が並んでるよ！」

「野次馬もいるようだし、ちょっと聞いてみるか。」

俺が列の最後尾の人に声をかけ、一体何の行列か聞いてみた所、どうやら俺達が探していた医者の診察をしてもらう為に患者が並んでいるとのこと。

「並んで待つ訳にもいかないし……ここは警邏の一環として先に中に入らせてもらうか。」

桃香「そ、それって職権濫用なんじゃあ……。」

「別に悪い事してるわけじゃないんだし、大丈夫だって。ほら、行くぞ！」

野次馬となっている人混みを抜けて行列が続く一軒家に俺達は入っていった。

そこにいたのはうつ伏せになっていた患者と…

？「うおぉぉぉ！げ・ん・き・になれぇぇぇぇぇ！！！」

大声で叫びながら治療をしている男が1人いた……。

桃香「えぇ！？あの人、何か叫びながら治療してるよ！？」

「……（汗）。」

患者「おお！？肩の痛みがとれましたぞ！」

？「疲労が蓄積し過ぎていたようだ。身体は1つしかないから無茶はしないようにな！」

患者「そうじゃな、適度に休みながら仕事も頑張りますわい。」

？「あぁ。お大事にな！」

治療を終えた患者が1人部屋を出ていった。

？「ん？次はあんた達か？」

桃香「あっ、いえ私達は患者じゃありません！」

「俺達は今、この街の警邏にあたっている者だ。
あんただな？最近噂になっている医者というのは。」

？「まぁ、自分で言うのも可笑しいが多分そうだろう。確かに俺は医者だ！」

「そうか……少し話を聞きたいんだが、いいか？」

？「構わないが、今は見ての通り患者が待っているからな……一通り診察を終えてからでいいか？」

桃香「患者さんを待たせる訳にもいかないし、別にいいですよ。ねっ、迅君？」

「そうだな、それじゃあ部屋の隅で待たせてもらうよ。（特に怪しい事はしていない……か。）」
俺達は椅子に腰掛け、診察が終わるまでの間、彼の治療を観察していた。

その医者は患者の症状を聞いた後、手をかざしながらその箇所を探していき、見つけると鍼を使って瞬く間に治してしまった。

桃香「凄い……本当にあっという間に治しちゃってるよ！」

「（へぇ……気の使い手か。身体に流れる僅な気の乱れを感じとって患部を直接治療しているな。）」

その後も彼の鍼治療で次々と患者が元気になって帰っていく。

「（別に何か教えを広めている訳でもないし、人違いだったのか？だとすれば…一体何者なんだ？）」

半刻後、ようやく最後の診察となり最後は母と子の親子のようだ。

？「待たせてすまなかったな。それで、どうしたんだ？」

母親「この子、最近咳が酷くて風邪でも引いたんじゃないかと思いまして……診てもらえませんでしょうか？」

？「よし分かった！それじゃあ早速、診させもらおう。」

医者は子供の前に手をかざし患部を探す……。

？「おっ！胸の辺りに僅かだが病魔の気を感じたぞ！」

母親「だ、大丈夫なんですか！？」

？「心配無用だ！この程度の病魔なら俺の力で直ぐに退治してやる！」

母親「そうですか……良かったわね。」

男の子「うん……ゴホゴホッ。」

医者は懐から鍼を取り出して身構える

男の子「えっ！？そ、それって……。」

男の子の顔が一瞬怯えた表情になる。

？「この鍼で軽く胸に刺せば、あっという間に風邪は治るからな！」

男の子「そんな……こ、恐い……。」

？「安心しろ！直ぐに終わるし痛みは全く感じないぞ！」

男の子「ヒッ……い、嫌だ！」

男の子は急に治療を嫌がり始めた。

母親「こ、こら！じたばたしないの！」

母親が服を捲り上げながら男の子を押さえる。

桃香「大丈夫だよ。このお医者さん、一度も失敗してないから直ぐ元気になるよ！」

「……。」

桃香も男の子を宥めているが俺は何か違和感を感じていた。

「（この子は最初から診察をしたくない様子ではなかった。けど、鍼を見るなり拒絶するかのように嫌がっている……まさか！）」

？「うおぉぉぉぉ！！」

医者が鍼を掲げると鍼が光を帯びてきた。

そして

？「我が身、我が気、鍼と1つなりっ！！病魔よ！光になれぇぇぇぇぇ！！！」

男の子「うわっ！……あ……。」

男の子は刺された直後、抵抗するのをやめて急に大人しくなった。

刺してから数秒後、医者は抜いた鍼を懐にしまう。

？「病魔は取り除いたぞ！これで治療完了だ！」

母親「ありがとうございます！！ほら、あなたもお礼を……。」

そう言い終わる前に、男の子は突然椅子から崩れ落ちた。

？「なっ！？」

桃香「えぇ！！」

母親「ど、どうしたの！？しっかりして！」

男の子「アッ……ウッ……。」

男の子は母親の呼び掛けに応じず痙攣している。

？「そんなバカな！？確かに病魔は退治したはずだ！これは……一体！？」

母親「この子に何が起こったんですか！？早くなんとかして下さい！」

母親は医者にすがり付くように叫ぶ。

？「し、しかし…俺の治療を受けてこんな症状になった人を俺は見たことがない……どうすれば…？」

医者も初めての経験で酷く混乱しているようだ。

「すいません！ちょっと失礼します！！」

？「お、おいあんた！」

「俺も少しばかり医療の知識があるんでね。ここは俺に任せてくれ！」

俺は直ぐに男の子の横へ行き症状を確認した。

「（脈拍数が高いな。呼吸も乱れているし目の焦点も合っていない…あれを使うか。）」

俺は腰に付けてある小物入れから袋を取り出す。

「桃香！水を一杯、すぐ持ってきてくれ！」

桃香「うん、分かった！」

桃香は俺に言われた通りに湯飲みに水を一杯持って来てくれた。

俺はその水の中に粉末を入れよくかき回し、こぼさないように男の子の口に流し込む。

しばらくすると男の子の痙攣は止まり、呼吸や脈拍も整いはじめて最終的に小さな寝息をたてながら眠ってしまった。

「よし、これで大丈夫だ！」

母親「息子は……大丈夫なんですか？」

「今は眠っていますが一刻半後には目が覚めます。その時には先程の症状は治まってるはずです。」

母親「あ、ありがとうございます！！」

母親は男の子を抱きしめながら俺に何度も頭を下げた。

？「な、なぁ…さっきの薬は一体？」

「いくつかの薬草を調合して粉末状にしたものだ。鎮静作用があるけど、睡眠効果もあって今は眠ってしまったんだ。」

桃香「この子の身に……一体何が起きたの？」

？「俺も見た事がない症状だった。外傷もなければ病魔も感じ取れなかったぞ。」

「もしかしたら……この子、『先端恐怖症』かもしれないな。」

桃香「せんたん……恐怖症？」

？「聞いたこともないな……。一体どんな病気なんだ？」

「剣や包丁、鋏、そして鍼みたいな先端が鋭いものに対して精神的動揺を起こす一種の心の病だ。

この子の場合はあんたが使用した鍼に対し発症して、身体に刺し

た事で身体に大きな負担になってああいう症状が現れたんだろう。」

母親「原因は……？」

「以前、刃物のような尖った物で大怪我した事があるんじゃないか？
だとすればその恐怖が心に大きな傷を残した可能性が高い。」

母親は記憶を遡りハッとした表情を浮かべる。

どうやら心当たりがあるようだ。

「今回は鍼を刺した事で倒れただけで生活にまで支障が出る程ではありません。
ただ、なるべく尖った物をこの子の周りに置かないように注意して下さい。」

母親「分かりました……本当にありがとうございました！」

母親は子供を抱きかかえて部屋を後にした。

？「すまない…自分の腕を過信したあまりに患者を危険な目に遭わせてしまうとは……。」

「まぁ今の時代、怪我や病気の治療は出来ても心の病までは治せないからな……。
それを抜けばあんたの医術は大したもんだよ。悔やむ必要なんてないさ。」

桃香「迅君の言う通りですよ。それだけの腕があれば多くの人達を救えるんですから、元気だして下さい！」

？「だがしかし、今回の一件があった以上、俺はもう一度自分の腕を磨く必要がある！
なぁ、お前がやった先程の処置や薬の処方は一体どこへ行けば教えてくれるんだ？」

「いや、あれは……独学…かな？」

まぁ、俺のいた時代の医学の知識を応用しただけなんだがな。

？「なら、俺にその医術を教えてくれないか！？
俺はこんな事で立ち止まる訳にはいかない……必ず大陸一の医者になると師匠に約束したんだ！」

医者は土下座までして頼みこんだ。

確かに今のこの医者の腕と俺が知ってる未来の医学があれば大陸一

も夢じゃないだろう。

けど、桜香の所で政務をしたり義勇兵を集めたりと忙しいからな……。

ん？待てよ……そうだ！

「教えるのは構わないが、ただし条件がある。」

？「なんだ？」

「今俺達は募兵を行っていて、人数が揃えば俺達が率いる義勇軍を結成する。
あんたにはその軍の医者として俺達に同行して欲しいんだ。」

？「軍医って事か……。」

桃香「そんなこと、勝手に決めちゃって大丈夫かな？」

「兵士が1人増えたのと対して変わらないって。ま、俺から桜香には伝えておくよ。」

？「分かった。俺を必要としてくれるなら今の俺はそれに答えるのみ！

俺の名は華陀　字は元化　真名は凱(がい)だ！よろしく頼む！」

「俺は姜維伯約　真名は迅だ。こちらこそよろしくな！」

こうして、華陀（凱）が俺達の仲間に加わった。

しかし、『神医』とまで呼ばれた人物に俺は教える事なんてあるのだろうか……？

約束してしまったが、先が思いやられるな……ｏｒｚ

～初めてのお仕事！（医者王登場編）～（後書き）

今回新しく加わった華陀ですが、詳しく調べてみると彼が五斗米道の継承者だったという記載が見当たりません。

本作では恋姫†無双どおり五斗米道という事にしてますが……今まで勘違いしてました。

という訳で史実に書かれている華陀についてちょっと紹介します。

華陀
字は元化
沛国ショウ県（言に焦）出身

名医として名高くい医者で神医（しんい）とまで呼ばれる程の人物。

麻沸散という麻酔薬を既に開発し切開手術を行えた。

うなり声を聞いただけで病状を見抜いたり、病気がいつ再発するのかさえ予知出来たとも言われている。

演義では毒矢を受けた関羽の肘を裂いて骨を削りとったり、重症の周泰を救ったりもした。

しかし、最後は曹操の頭痛治療の際に「頭を切開して病根を取り除くべし」と診断し暗殺者だと誤解した曹操に投獄され獄死した。

正史では治療する為に一度書物や処方を取りに家に帰ったが、その後頑として家を離れようとせず、曹操の怒りをかって投獄、そのまま獄死した。

～義勇軍入隊試験～（前書き）

お久しぶりの更新です。

今回はかなり長めになってしまいました。

深夜に編集して、後半がグダグダになってます（涙）。

駄文ではありますが広い心で見てくれれば幸いです。

～義勇軍入隊試験～

～襄陽城第一試験会場～

「おぉ～！　凄い数だな……。」

今、俺の目の前に約６００人の義勇軍志願者が集まっている。

予定通りに開かれた義勇兵の入隊試験、各郡や県から多くの志願者がここ襄陽に集結してくれた。

実際は総勢約３０００人が集まったが、試験会場を五つに分けているのでここにいるのは全体の５分の１に過ぎない。

それでも、これ程の数を一気に見たのは学校の全校集会や行事位しかなく正直、少し緊張している。

というのも、この第一会場の試験官は俺な訳で、副官は最近俺達の仲間に入った凱がする事に。

ざわ…ざわ…と集まってきている志願者達の目線は前に立っている俺と凱に集中している。

凱「そろそろ時間だ……って大丈夫か？」

「ん？　あぁ、心配するな。昔の事を少し思い出してただけだ。」

凱「昔の事？」

「これぐらいの人数の前で話をした時のな。ま、今となってはいい経験をしたなって思っただけだ。」

凱「そうか、まぁ気を楽にしていけ。試験内容は竹簡に書いてあるんだしな。」

「それもそうだな。」

俺と凱は一歩前へ出ていった。

「義勇軍へ入隊を希望する志願者諸君！　よく来てくれた。遠方からはるばる来てくれた人もいると聞いている。まずは一言、お礼が言いたい！」

会場は静まりかえり６００人全員が俺の話を聞く。

「今や国は乱れ、盗賊達の横暴によって力なき人達が命を落としている。
ここにいる人の中には盗賊によって大切なものを奪われた人がいるのかもしれない。」

志願者達は俯いたり悔しんだりと様々な表情を浮かべている。

「そんな盗賊共の手から同じ民を救う為に皆さんはここに集まってくれた……そうですか？」

志願者達「おぉぉぉぉぉぉ！！」

全員が拳を突き上げる。

「その忠義、勇気、覚悟は本当に嬉しい……だがしかし！」

「兵士や軍にとって本当に必要なのはそういった志ではない。
最も重要なのは……力だ！」

精神云々も重要ではない訳ではない。寧ろそれは良い事だ。目指すものがあればそれに向かって努力する…人であるなら何かしらは持っている筈。

「義勇軍に入隊すればいずれ敵と戦う事になる。相手は少なくとも人を殺す事に抵抗を感じてはいない。
そんな敵を前に志だけでは勝つことは出来ない！勝つには戦う術を身に付ける事……それ以外にはない。」

俺は如意金箍棒を回し、地面に突きつける。

「それを踏まえた上で今日の試験を行う！　諸君の志が本物であるなら、きっとこの試験を乗り越えられると俺は信じている！……以上だ。」

志願者達「応っ！！！」

凱「それじゃあ試験内容とその時間割を発表する！」

1日目は基礎的な運動能力を調べる体力テストを行う。

兵士は戦場での陣形や行軍など殆ど集団で行動する。

当然、体力不足で遅れをとる者がいれば軍全体の進軍距離が短くなったり、敵にその隙を狙われ陣形を崩されるかもしれない。

戦う術が必要とは言ったがそれは、動く体力があるのが前提であり納得してもらわないと困る訳で……。

凱「……以上が今日の内容だ！　各自、開始時刻には決して遅れる事のないように！」

一度、準備運動等の休憩をし半刻後、第一科目の準備が整った。

「よし、まずは城外三周の走り込みだ！途中棄権するのは自由だから無理をして倒れることがないように！」

志願者達「応っ！！」

果たしてこの中から何人が俺達と戦場を共にするのだろうか……。

その夜

～街のとある料理店～

桃香「かんぱ～い！」

４人「乾杯！！」

桃香の乾杯を合図に俺達は盃を上に掲げ、お互いの盃と軽くぶつけ合った。

義勇兵入隊試験の１日目を終わらせた俺達は書類の整理を終わらせて街の料理店で打ち上げをしている。

明日は１日目の試験合格者の帳簿記載や次の試験内容の最終確認を行う為、志願者にしてみれば事実上の休みとなっている。

当然、数日にかけての試験である事は志願者達も事前に知らされているので、彼等は各郡へ派遣された兵士達が使っていた兵舎が宿泊先だ。

「やっぱり仕事した後の一杯は格別だな！」

桃香「もぅ～迅君ったらおじさんみたいな事言わないの。」

そういえば、俺もうアラフォーだったな……（精神年齢３６歳）

「そう言うなって。試験中はそれ程でもなかったが、あの後の書類の処理は本当にキツかったんだから。」

藍里「各会場ごとの書類で振り当てても５００人以上の数になりますからね。」

神楽「しかし、各地に立て掛けた募兵の立て札の側に氏名や出身地等の個人の情報を記載する木簡を用意して下さっていて、非常に助かりました。」

凱「本来の義勇兵の募兵では集合場所に来てから記載してもらうからな。
　あれだけの人数で行っていれば今頃も試験をやっていただろう。」

「……どっかの誰かさんが職務放棄しなけりゃもっと早く始められたけどな？」

俺は凱に視線を向ける。

というのもこの打ち上げに俺と凱は遅刻してしまい、桃香達を少し待たせてしまったのだ。

理由は先程述べたとおり

途中まで手伝っていた凱が書類の一部を軍事担当の文官に届けに行ったきり帰ってこなくなり、当てもなく探しに行けば余計に時間が

掛かると思い俺は一先ず書類整理を終わらせた。

（この時、集合時間を１０分経過）

そして凱を探しに行ってみれば、城の書庫で山積みの医学書に囲まれながら読み耽ている凱を発見。

（集合時間を２０分経過）

凱に鉄拳制裁を下し、凱の読んだ本を片付け部屋に戻り終わらせた書類を文官の下に運ぶ。

（集合時間３０分経過）

城から当店まで全速疾走して更に5分……以上。

凱「ギクッ！……。ま、まぁ結局こうして始められた訳だし…細かい事は気にするな…な？」

「フッ……来月の給料査定が楽しみだな。」

凱「は……ははは……（泣）。」

桃香「もぅ、迅君！　遅れた事なら私達も気にしてないし、あんまり凱君を虐めないの。」

神楽「そうですよ。それに、迅さんがその提案をして下さったお陰でこの様な時間を過ごせるんですから、寧ろ私達は感謝しているんですよ？」

藍里「そういう訳ですから……はい迅さん♪」

そう言って藍里が俺の盃に酒を注いでくれた。

「おっと、ありがとうな藍里。」

桃香「この料理、全部藍里ちゃんが作ったんだよ？
どれもスッゴく美味しそう～！」

「そうだな、冷めないうちに頂こう！」

俺達は藍里の手料理に舌鼓を打ちながら互いの親睦をより一層深めていった。

～一刻後～

「ふぅ……。」

俺は一度席を外して外の空気を吸いにいった。

お酒で少しぽかぽかと暖まった身体にそよ風があたりとても心地よい涼しさだ。

辺りはすっかり暗くなっていてより一層月の光が明るく感じる。

「（これだと夜に出歩くのは少し危ないな……灯籠を作って火を灯すか？
いや、夜間の警邏隊を別に設けるべきか……。）」

桃香「じ～ん～君♪」

考え事をしてる俺に桃香が後ろから声をかけてきた。

「桃香…。」

桃香「風が気持ちいいね～。」

桃香がうーんと背伸びをしながらそんな事を言う。

桃香「1人で考え事？」

「あぁ、夜はこうして視界が悪くなるからな、この通りに灯りを照らすものでも置いた方がいいかなって。」

桃香「もぅ……こういう時位、仕事の事は忘れてもいいんじゃない？」

「それもそうだな……。」

最近は警邏や街の治安についての案件ばかりやってたからついついそんな事を考えてしまっているようだ。

桃香「ほら、ここが空いてるよ。　一緒に座ろ♪」

桃香に促されて店の前にあった長椅子に腰掛ける。

そして桃香はどこからか盃を2つ取り出し片方を俺に渡す。

桃香「桜香さんが交州から取り寄せた果物酒だよ。迅君もどう？」

「へぇ～交州からか…。それじゃあ頂こうかな。」

桃香が俺の盃に酌をしてくれ俺もお礼に桃香の盃に酒を注ぐ。

注がれた盃からほんのりと果物独特の甘い香りが漂い、その香りに誘われるかのように俺は口に入れる。

桃香「月が綺麗だね……。」

ふと、桃香が呟く。

大きな満月が夜空に輝き、うっすらと辺りを照らしている。

「あぁ、こんな綺麗な満月を見たのは初めてかもな。」

桃香「迅君のいた国には月はなかったの？」

「あるよ、俺の国にも。　……けど、ここの月は空気が澄んでいて更に綺麗に見えるな。」

桃香「へぇ～、そうなんだ……。」

桃香は少し考えた表情を浮かべている。

桃香「やっぱり迅君も故郷が恋しくなったりするの？」

「う～ん……懐かしいと思う事はあるけど、そういった気持ちにはならないな。
向こうでは俺は既に死んでる身だし、この世界に生まれてもう十数年だからな……まぁ第二の故郷とでも言うべきかな。」

桃香「第二の故郷……か。」

「それに、俺がいなくなったら今の桃香を誰が支えてやるんだ？」

桃香「え？……どういうこと？」

急に自分の事を言われた桃香が俺の顔を見る。

「最近の桃香はちょっと無理をし過ぎてるからな。　このままだと身体壊すぞ？」

桃香「そ、そんな事ないよ。迅君に比べたら私なんて……。」

「朝、鶏の鳴き声と共に起床した城の侍女が起こしに行くと、既に着替えを終えて九章算術を読んでいる桃香を発見。
声を掛けられた桃香はそのまま朝食を取りその後、城内の庭で神楽から剣術の稽古を受ける。
そして残りの午前中は警邏で街に赴く。」

「午後は桜香や菖蒲と一緒に政務の手伝い。
暫くしたらまた外出し、今度は文聘殿の軍の調練に同行。 調練が終了次第城に戻り藍里を講師として兵法について勉強。 夜、就寝時間になっても部屋の明かりは数刻以上消えないそうだ……。」

桃香「ど、どうして……そこまで？」

「桜香達や侍女に桃香の事を聞くと、みんな同じ日に何処かしらで見かけたり、教えてあげたりしてるみたいだからな。
始め聞いた時は本当に驚いたよ……本当に大丈夫か？」

桃香「大丈夫だよ！ ちゃんと睡眠はよくとって……」

桃香が言い終わる前に俺は右手で桃香の左頬に触れる。

「目の下の隈がこんなにあるのにか？」

そして桃香の左目の下を親指でゆっくりとなぞると…。

桃香「あっ……。」

黒ずんだ隈がはっきりと浮かび上がった。

「やっぱりな……いつもより少し化粧が濃いと思ったんだよ。
桃香、本当は今も眠いんだろ？」

桃香「うん……ちょっとね。」

どうやら図星だったようで桃香は小さく欠伸をする。

「戦うのは俺や神楽に、策を練るのは藍里に任せろ。　もし怪我をしたって凱がいるから心配する必要はない。
桃香はただ……自分の描く理想に向かって進めばいい。　俺達はそんな桃香の理想の為に戦うって誓ったんだ。
その桃香が過労で倒れたら本末転倒だろ？」

桃香「……ごめんなさい。　みんなの期待に応えないとってずっと感じてたから……逆に心配かけちゃったね。」

「その気持ちさえあれば俺は十分だ。きっと神楽達だってそう言う

よ。
だから……今は身体を休めろ。　いいな？」

桃香「うん……あり…が…と……。」

俺に言われて気を緩めたからか、それともお酒に酔ったからなのか、桃香は俺の肩に寄り添いながらそのままスースーと寝息をたてながら眠ってしまった。

この体勢だと桃香が寝づらいと思い、起こさないよう横に倒し俺が桃香に膝枕をする形になった。

「（うわ！……体温がスッゴく伝わってくる…。）」

顔を少し赤らめた桃香が俺の膝で無防備に眠っている……これはもしや！？

「（い、いや駄目だ！　俺と桃香はあくまで主君と家臣の関係……邪な気持ちは互いの信頼関係に悪影響を及ぼす！）」

俺が自分の煩悩と戦っていると、不意に人影がこちらに近付いて来たのが目に入った。

「（誰だ……こんな時間に？）」

そして店前に来てやっと正体が判明した。

桜香「こんばんは♪　夜分遅くに悪いわね～。」

「お、桜香さん！？　どうしたんですかこんな夜遅くに？　しかも……お一人ですか？」

桜香「流石に一人で出歩く程無用心じゃないわ。ね？然（ぜん）。」

然「左様でございます。」

桜香の後ろには文聘が護衛を務めていたようだ。

桜香「それを言うなら貴方の方こそ何してるのよ？」

「へ？……あっいや、これは……。」

然「お酒の席を抜けて逢い引きですかな？」

「ち、違います！　これは桃香が眠いって言うから膝を貸してるだけで……。」

桜香「はいはい♪　ま、私達は個人の色恋には深く干渉しないから安心して。」

「はぁ……（汗）。」

然「桜香様、そろそろ本題に。」

桜香「おっといけない。今は大事な用件があって来たんだった。」

「大事な用件…？」

桜香「それも……迅、貴方に関しての話よ。」

先程とは打って変わって桜香の顔付きが君主のような威厳溢れる表情に変わる。

「単刀直入に聞くわ。

迅、貴方は……天の御使いの使者なのかしら？」
「！？」

な、なんで桜香がその事を……？
桃香達以外には話してない筈だ。　内密にするように言ったから誰かが言いふらしたとも考えづらい。

「な……何故その話を？」

「『管輅』という占い師が洛陽を始めとして各地で噂してるのよ。
然、その一文を呼んで頂戴。」

然「御意！」

そして懐から取り出した巻物を広げ文聘が読み始めた。

【蒼天を切り裂いて天より飛来する一筋の流星。
流星は光輝く衣を纏いし『天の御使い』を乗せ大地に降り立つ。
そしてこの国に転生されし４人の『天の使者』と共に乱世を鎮静す…。】

然「……以上が分かりやすく簡潔にした占い師の言葉です。」

「……。」

桜香「占い師が噂を流し始めたのは数週間前……。
その時は既に貴方はここにいたわ。」

「……俺がその使者っていう証拠は？」

桜香「証拠っていうか……あまりにも貴方の提出する案件が私達の常識を越えてるのよ。」

然「街の衛生管理、店舗や戸籍登録、警邏体制の見直し、それら全てを可能に出来る財源の確保等。
我らの知識では想像も出来なかった事をお前はまるで知っているかのように書き出していた。」

桜香「そして、今回の義勇軍の編成もそう。一次試験終了時点での全合格者を採用。
二次試験で落ちたものを常時は新地の開拓で作物を生産。非常時

には兵士として出兵させる……屯田制だったかしら？それもそうよ。」

知識を乱用し過ぎたか……思わぬ落とし穴だな。

桜香「どの案件も素晴らしいのは確かよ。そのお陰でこの街もより良くなっているのも事実。
だからこそ、貴方が何者かを知る必要があるの。私達のとっても貴方達にとっても私は大事だと思うわ。」

確かに今、こうしていられるのも桜香が俺達を雇ってくれたからな訳で、そんな恩人にいつまでも身分を偽っているのは今後、桃香にとって色々と不味い事になりかねない。

「分かりました……正直に言います。」

俺は自分の本当の正体を2人に白状した。

2人には予想通りだったらしく顔色一つ変えない。

桜香「なるほど……ね。」

然「如何いたしますか？」

桜香「う～ん、今日中に決めるのは難しいわね。一先ず保留って感じかな？」

「保留……ですか。」

桜香「勘違いしないでね。私の独断で決めるにはちょっと早すぎるってだけ。
　貴方に面識がある菖蒲にも話すべきだと思うし、数日後には返答するから。……帰るわよ然！」

そう言って2人は城に帰っていった。

その後、打ち上げも終了し俺達は4人揃って城に帰る途中だ。

桃香はぐっすりと眠っている為、俺が背負っている。

帰り道、桜香達に自分の本当の事を伝えたことを神楽達に話した。

「すまない……みんなには内緒って言ってた本人が白状するとはな。」

神楽「気にする事はありません。隠し事はそう長い間続くものではありませんよ？」

藍里「大丈夫です！　保留とは言いましたが、きっと桜香さんも許してくれるはずです。」

凱「俺も初めて聞いた時は驚いたが、今となってはそんな事はもう関係ない！
俺達は仲間だ。そうだろ迅？」

「みんな……ありがとな。」

仲間か……凄くいい言葉だなと俺は改めて実感した。

桃香「大丈夫……私は……ずっと一緒に……いるからね？」

桃香が俺の耳元で囁く。

俺はびっくりして桃香の顔を見るがまだ眠っている……寝言か？

そんな事を考えつつ俺達は城へとたどり着いた。

「ずっと一緒にいる……か（照）。」

その言葉が頭から離れず、その日の夜は寝付けなかった俺がいたのは言うまでもない。

～義勇軍入隊試験～（後書き）

今回は天の御使いの噂が大陸に広まったという訳で、あの種馬登場フラグか！？

と思いきや、彼の登場はやはり反董卓連合編に持ち越しです。

さて、今回は新しく加入した医者王　華陀の能力値を公開です！

統率Ａ
武力ＡＡ
知謀Ｂ
政治Ａ
人望ＳＳ

武力に関しては独自設定で合気道のような武術を会得しています。

能力値ではＡＡですが、まぁ脳筋連中に対してはＳＳとでも思って下さい……。

～【黄巾の乱】勃発！～（前書き）

また更新遅れました（汗）

やはり駄文、駄作と投稿となります。

今回は短めに早い展開でいきます。

あと桜香の出番かなり多めでそれ以外は少ないです。

～【黄巾の乱】勃発！～

桜香「さて，全員揃ったわね。」

今、玉座には桜香を筆頭に桃香，神楽，藍里，凱。そして重臣の文聘，向朗らが集まっている。

桜香「それじゃあ、軍議を始めるわ……っとその前に……桃香。」

桃香「え？……は、はい！」

桜香「ここ最近の活躍、私の耳にもしっかり届いてるわ。貴方達の義勇軍は結成して間もないのに全戦全勝。
街の人達からの称賛の声もよく聞くわ。本当にありがとね♪」

桃香「いえ、私達は当然の事をしてるだけです。
それに、戦いに勝てているのも桜香さん達が物資や兵糧を準備してくれているからですよ。」

義勇軍が結成されてからここ最近、近隣の郡や県が賊の襲撃に遭い、

俺は桃香達と一緒に救援そして盗賊の討伐を行っている。

どの盗賊も千を越えない規模で統率もとれていない烏合の衆。

毎日のように厳しい調練をしている俺達の精強な兵士に比べれば、集団でも個人でも劣る。

そこに神楽の武や藍里の知略を用いれば全勝も納得いく。

勿論、だからといって慢心はしない。こちらの被害も決して無い訳ではないのだから。

その同士達の思いを引き継ぎ、俺達は一戦一戦気を引き締めて戦場に赴いているのだ。

桜香「まったく、桃香は本当にお人好しなんだから……。　まっそんな桃香達のお陰でここ一帯の治安は比較的安全に保たれてるわ。

けど、他の地域ではそうも言っていられない事態になっているの……菖蒲。」

向朗「はい。」

桜香に代わって向朗が説明にはいる。

向朗「現在、大陸北部を中心に大規模な武装蜂起が起きています。

その中には盗賊だけでなく農民も参加しているようで、その数は

推定数十万と言われています。」

桃香「数十万…！？」

神楽「それ程の数が……ほぼ同時期に動き出した訳ですか？」

向朗「そうみて間違いないでしょう。どうやら朝廷内に内応者を置いて挙兵の時期を見計らっていたようです。
　しかし、それが逆に皇帝の耳に直接入った要因にもなったのですけどね。」

内応者か……たしか、馬元義だったかな？

部下に密告されて捕まり、最後は車裂きで刑死。

流石にあんな死に方だけはしたくない……。

向朗「そして、現在その暴動は幽州、冀州、豫州、それに江東でも発生しています。益州でも一時期起こりましたがすぐに鎮圧されたようです。」

桜香「さらに長沙太守からの報告でここ荊州の南部でもその集団と思われる盗賊が発見されたわ。」

藍里「その地域で起きた一連の蜂起が、全て関連しているというのですか？」

向朗「えぇ、報告によると乱に参加している者は全員、黄色の布を頭に巻いているようです。
偶然にしては余りに数が多すぎるし……何らかの意味を持っていると思われます。」

「黄色い……布か。」

【蒼天已に死す　黄天まさに立つべし　歳は甲子にありて　天下は大吉】

これが黄巾党の合言葉である。

蒼天＝漢王朝を意味し黄天は自分達を指している。

この的を射たスローガンを掲げ張角達は民衆を味方に付けて戦ったとされている。

こんな世界でも基盤はれっきとした三国志って事か……歴史はそう簡単に覆られないようだ。

桜香「その言い草、知ってるのね……迅？」

「え？　えっと…その…まぁ。」

桜香「既に霊帝が討伐の詔を発したわ。大将軍の何進は各地に官軍を派遣している。
私は昔、何進に世話になった身だから、今回は私達も官軍に加勢する予定よ。　でも、今の私達には敵に関する情報が少なすぎるの。
だから、お願い……貴方の力を私達に貸して頂戴。」

「……けど、あんた達は俺の事を……。」

向朗「その件に関しては、心配ご無用ですよ？」

「えっ？」

桜香「始めは処罰するべきか悩んだけどね、久しぶりに街の視察に行った時に貴方に是非ともお礼がしたいって人達が大勢いたの。
自分の足で街へ来てくれて、そこに住む私達と同じ目線に立って対等に接し、何か問題があれば直ぐ解決案をだしてくれる人物がいるってね。
……そこまで言われてる人を処罰出来る程、私は駄目君主じゃないわよ。」

「桜香……さん。」

桜香「もぅ、今さら畏まらないでよね。今まで通り『桜香』で結構よ♪」

文聘「無論、拙者も真名で構わん。これからは『然』と呼べ。敬語もいらんからな。」

向朗「私は最初から認めていましたよ？
何せ藍里が真名を預ける程のお方ですからね。
私の真名は『菖蒲』これからはそうお呼びになって下さいね？」

これはまぁ俗に言う……ご都合展開ってやつか？

いずれにせよ、どうやら俺はお咎め無しのようだな。

凱「どうやら大事にはならないみたいだな。良かったな迅！
まぁ最も、もし桜香に何か言われそうになったら桃香が……。」

桃香「ちょ、ちょっと凱君！？」

慌てた様子で凱の口を抑える桃香。　まぁ桃香の事だからある程度予想はつくけど……。

桜香「はいはい！　今は軍議中なんだから、そんなに騒がないの。
　それじゃあ……迅、よろしく頼むわ。」

「分かった。けど、今までの経験上、俺の知ってる知識が全て正しいとは限らない。
　それだけは理解して聞いて欲しい。」

俺はその集団の名前を『黄巾党』そして首謀者の名が『張角』そして目的は打倒漢王朝…この３つを話した。

桜香「黄巾党…言い得て妙ね。」

然「その張角とやらがその黄巾党の首領か……人相や特徴は？」

「それは流石に……。」

劉表軍兵士「報告します！」

突然、１人の兵が玉座に入ってきた。

劉表軍兵士「何進大将軍からの書状が届きました！」

桜香「すぐに持ってきて！」

桜香は兵士から書状を受け取り、その場で広げて読み始めた。

桜香「……ふむ。」

桃香「桜香さん。　何て書かれてますか？」

桜香「これは……文官に書かせたようね。　全く、相変わらず人任せなんだから……。」

それから桜香は書状き書かれた内容を説明してくれた。

内容はこうだ。

1、今回の黄巾党討伐参加を一番始めに伝えてくれた事に感謝している。

2、今回の賊、民衆による暴動の首謀者、その目的は不明。

3、暴動の発端地域からむて首謀者は冀州～豫州付近にいる模様。
劉表軍は荊州から北上し各諸侯と洛陽から派遣する官軍で挟撃し何としてもこの反乱を鎮圧せよ。

……との事だ。

桜香「ご丁寧に官軍を指揮する将軍の名前も記載されてるわ。」

菖蒲「それ程、信頼を得ているといった所でしょうか。」

桜香「まぁいいわ……然！　出陣の用意を、2日後に出るわよ！」

然「御意！」

桜香「それと、桃香！」

桃香「はい！」

桜香「今回の相手は今までとは圧倒的に数が違うわ。　それに荊州を出る長い遠征になるけど…いいわね？」

桃香「はい！　私が今こうしていられるのも桜香さんのお陰です。
こんな無意味な戦い…早く終わらせないと！」

桜香「ふ～ん。　以前に比べてだいぶ凛々しくなったじゃない。
他の皆もそれでいいのね？」

神楽「無論、全ては桃香様の意のままに！」

藍里「ふわわっ！？　わ、私も頑張ります！」

凱「あぁ、俺も1人でも多く兵士達の命を救えるよう全力を尽くす！」

全員、最初から答えは決まっていたようだな。

しかし、俺達は初めて歴史に残る戦いに身を投じる事になる。

どれ程、史実との誤差が生じているのか検討すらつかない。

けど俺は……いや、俺達は負ける訳にはいかない。

何故なら……物語はまだ始まったばかりなのだから

～【黄巾の乱】勃発！～（後書き）

漸く『黄巾の乱』編に突入しました！

ちょっと展開遅めですかね？

他の御使いの使者達がこの乱にどう絡んでくるのかは……お楽しみです。

さて、黄巾党といえば既に1人、早い段階で名前が上がりましたね。

そう、『厳政』です！

彼は演義にしか登場しない架空の黄巾賊の将です。

まぁ、恋姫の原作が演義なんでモブキャラとして出しただけですが……。

史実での説明は、他の黄巾党の将が登場したら一気にしちゃおうと思っています。

～驚愕！？　黄巾党の本気～（前書き）

週末更新です。

今回の黄巾党は一味違いますよ～？

というのは主な戦場として「豫州」「冀州」「雍州」の３つに絞っています。

この三ヶ所で物語の主役達が活躍しますからね♪

そこの黄巾党は強めの設定です。

え、雍州に黄巾党はいない？　そこはノリですノリ（笑）

～驚愕！？　黄巾党の本気～

劉備隊兵士「劉備様、現在我が部隊は荊州を抜けて豫州に入りました。」

桃香「うん、分かった。　また何かあったら知らせてね。」

桃香に報告を終えた兵士が自分の持ち場に戻った。

桃香「……。」

桃香がちょっと不安そうな顔を浮かべている。

「大丈夫か、桃香？」

桃香「う～、とうとう荊州から出ちゃったよ～。大丈夫だよね？」

なるほど、普通に考えたら未確認の武装した集団が自分の州で彷徨いていたら、怪しまれても仕方ないか。

「心配しなくて大丈夫だ。桜香が前もって豫州刺史の孔抽に許可をもらっているからな。」

桃香「そっか、でもさ……今桜香さんいないんだよね？」

「まぁ…確かに……な（汗）」

そう、今は桃香，神楽，俺の部隊と凱の医療隊の5千、さらに桜香の部隊の一部の計1万が北へ向け行軍している。

本来なら桜香や然の部隊の3万に従軍する予定だったのだか……。

それを説明するには数刻前に遡らなければいけない。

それはまだ俺達が桜香達劉表軍と一緒に襄陽城から出発して2刻も経っていない時に起こった出来事だ。

桜香「随分と馬の扱いが上手になったじゃない桃香。」

桃香「はい♪　初めは恐る恐るって感じでしたけど、懐いてきたらこの子から私を乗せるようになってきました！」

そう言って桃香が自分の愛馬の背中を擦ってあげている。

桃香の愛馬……言うまでもないだろう、そう『的盧』である。

この的盧と桃香がいつ出会ったのかというと、かなり以前に俺達が藍里の村で厳政率いる盗賊団と戦った時に俺が激闘（？）の末に討ち取った厳政の乗っていた馬が的盧であった。

俺もその時、的盧を見たのだが飼い主の厳政にあまり餌を与えてもらっていなかったのか、かなり痩せ細っている印象だった。

その後、村で宴をやって桜香の城に招かれ村を出発するまでの間、ずっと的盧は何処へを向かう訳でもなく地面に座っていた。

恐らく、もう歩く力すら残っていなかったのだろう。
その姿を見た桃香がいてもたってもいられなかったようで的盧の所へ行き保護。　そして桜香に一緒に連れて行くようお願いした。

桜香は渋々了解して軍の荷車に乗せられた的盧は俺達と一緒に襄陽に到着。

世話係は当然，桃香で餌代等も桃香の給金から差し引かれる形になった。

桃香は毎日に的盧を手厚く看護し、その結果的盧は本来の躍動感溢れる逞しい名馬へと復活した。

いや、『名馬』じゃなくて『凶馬』だったな。

凶馬の象徴である脚が四本とも白い「四白」で、おまけに額に白点があればそれは凶馬中最悪と言っても過言ではないだろう。

藍里もその事を知っていたのでそれとなく桃香に伝えたのだが……

桃香「ただ脚や額が白いからって不幸だの災いがあるだのなんて言ったらこの子が可哀想だよ！
　それに、誰かを乗せてから自分が乗るなんてそんな人を陥れるような事も私はしたくない！」

……とスッゴく怒られました。

まぁ災い云々は恐らくアイツ（厳政）が貰ってくれたとは思うけどな。

俺の愛馬，飛電とも仲が良いみたいで今も飛電の隣に引っ付いている。

桜香には「まるで貴方達みたいねぇ～♪」とか言われ嬉しいやら恥ずかしいやらな訳で……。

まぁそんな会話をしながら行軍していると早馬が桜香の所にやって来た。

様子を見る限りではただ事ではなさそうだ。

急使「ほ、報告します！」

桜香「何かあったの？」

急使「南陽付近に例の賊軍が出現！　付近の砦を制圧し籠城しています！」

桜香「なんですって！？　他に情報は？」

急使「はっ、軍を率いているのは張曼成と名乗る男です！　自分を神上使と称し砦を占拠、兵力はおよそ４万です！」

桜香「よ……４万？　それほどの規模が今まで確認出来なかったの！？」

「どうやら…ただの賊とは訳が違うようだな。」

官軍や俺達が狙うのはあくまでも黄巾党……黄色い頭巾をした連中だ。

少し頭を使えばいくらでも誤魔化すことだって出来るだろう。

急使「現在、南陽太守の袁術が討伐に向かいました。　それで…」

急使が一通の書状を桜香に渡す。

桜香「これは…？」

急使「援軍要請の書状です。」

桜香「えっ！　援軍要請！？」

驚いたのは桜香だけではない。　俺も内心、桜香と同じ反応だ。

袁術といえば現渤海太守、袁紹と同様袁家の１人である。

親子４代に渡って三公（司徒，司空，太尉）を輩出したそれは三国志一の名門出身者。

当然、諸侯の中でも財力、兵力共に現在袁紹とトップを争っているあの袁術が援軍を頼んでくるとは思わなかっただろう。

桜香「『現在、我が軍も度重なる黄巾党討伐で兵士達の疲労が限界に達している。
　こちらから出せる兵力は見積もって３万。出せるだけでいいから南陽黄巾党の討伐に加勢して欲しい』……か。」

桃香「どうしよう、袁術さん達もかなり苦しい状況みたいだよ。」

神楽「恐らく3万の兵士達も多くは疲労困憊の筈です。
　相手は砦の中、万全の態勢で待ち構える4万の黄巾党……手厳しいですね。」

藍里「このまま袁術軍だけで向かえば迎撃され更に追撃を受け最悪の場合……南陽が堕ちるかもしれません。」

洛陽は北東の黄巾党に対抗して防衛線を敷いているが南は桜香や袁術が守っているので手薄になっている。

また主力の官軍も討伐の為出兵しているので、下手をすれば洛陽にさえ危険が及ぶ可能性も無視出来ない。

然「むむ……如何いたしましょう桜香様？」

桜香「仕方ないわね……ここは」

桃香「あ、あの桜香さん！　袁術さんの援軍には私達が…」

桜香「それは駄目よ。　相手はあの袁家、貴方達が行ったら自分の

被害を抑える為にきっと先鋒を任されるわ！」

「なっ！？　兵力は袁術の方が多いだろ！」

然「実質、荊州北部を統治しているのは南陽太守の袁術だ。　軍事権も向こう側にあるようなもの。
　桜香様が直々に行かねば対等な立場とは言えん。」

桜香「それに、貴方達はあくまでも客将よ。　下手に逆いでもしたら……ね？」

桜香自身にも，とばっちりがくるのかよ……。

さすが『偽帝』　とんでもないない奴だな。

桜香「最近は以前に比べれば善政を行って民衆の支持も高まってきたけどね。
　何事も慎重にいかないと足下付け込まれるわよ。」

桃香「じゃあ、今回は桜香さんが…？」

桜香「ごめんなさいね…南陽が黄巾党の手に落ちれば荊州の民どころか洛陽さえ危ないわ。
　私達は3万を引き連れて南陽に向かうから、桃香達は私達の兵5

千を含めた1万でこのまま進んで頂戴。
無理に黄巾党とあたる必要はないわ。官軍や諸侯と連携して確実に倒していくの。　貴方達なら……出来るわよね？」

桃香「分かりました！　桜香さんも気を付けて下さい！」

こうして桜香、然の劉表軍2万は進路を南陽へと変更し俺達と別れる事になった。

そして最初に戻る。

「でもさ、俺達だけで黄巾党を相手する訳じゃないだろ？
桃香が不安そうな顔だと兵士達も心配するぞ。」

桃香「そうだよね。　戦う前から逃げ腰じゃあ勝てる戦も勝てないか…。」

「それに俺が付いてるし…な？」

こっちは史実の記憶持ちだからな。　黄巾党に負けるような軟弱な俺達や兵士ではない。

「迅君……ありがとう♪」

俺に満面の笑みを浮かべる桃香。　顔が少し赤いのは先程、休憩をとった際に薄めの酒を飲んだからかな？

普通の水に比べて長い期間の保存が出来るから遠征には重宝するようだし。

「そうだ神楽。　斥候から何か報告は？」

神楽「いえ、特に今はなにもありません。　ここ周辺でも黄巾党が目撃されたのですが……逆に不自然ですね。」

凱「ここの黄巾党が南陽に移動して暴れたんじゃないのか？」

藍里「４万の集団か数日で州を渡って砦を制圧するとは到底思えませんけど…。」

名軍師もお手上げか。

確かに俺が知ってる黄巾党よりは少しばかり違うようだ。

奴等の中でそれほど有能な将はいなかったと思うんだけど…？

神楽「あれは！　桃香様、斥候が戻ってきました。」

斥候が俺達の下にやってきた。

斥候「報告、この先１５里の距離にある陳郡付近で黄巾党と官軍が戦闘！
　黄巾党の勢いを止められず官軍が敗走！　追撃を受けるも韓馥軍の救援により黄巾党も一時撤退しました！」

「官軍が負けたか……両軍の推定兵力は？」

斥候「官軍が５万に対し黄巾党は２万５千と思われます！」

凱「おいおい……２倍の兵力差を覆されたのか！？」

斥候「始めは黄巾党５千を相手してましたが……伏兵の奇襲を受けた模様です。」

俺達は全員、言葉が出なかった。

その後の報告で伏兵は先頭が『錐車※』と呼ばれる兵器を使用していたという。

※錐車…大型の手押し車の先に錐のように鋭くした丸太いくつも付けた兵器。

伏兵による奇襲と兵器の使用、盗賊や農民上がりの連中がそんな戦い方をするとはな……。

神楽「想像以上に苦しい戦いになりそうですね。」

藍里「伏兵に兵器ですか……斥候をもう一度放ち、敵情を探りましょう。
　これからは私達も一層慎重に行かなくてはいけません。」

凱「やはり俺達だけで戦うのは危険過ぎるな。　迅、どうする？」

「……桃香。」

桃香「うん、弱音を吐いてちゃ駄目なんだよね。」

桃香は気持ちを落ち着かせる為、３回深呼吸をした。

桃香「私達はこれから官軍、韓馥軍と連携して黄巾党と戦う事にします。　使者を官軍に送って下さい。その間、私達は速度を落としつつ行軍。　返答がきたら私達から出向いて今後の方針を話し合います。」

「分かった！　官軍に使者を送るぞ。　急げ！」

俺は桃香の指示通りに動きまた、部隊も奇襲に対応できるよう再編し再び斥候を放った。

桃香「ふぅ……。」

「桃香、一通り終わらせたよ。」

桃香「うん、ありがとう。」

「さっきの指示、様になってたな。カッコよかったぞ。」

桃香「えへへ♪　そう？　でも正直、緊張で何言ったのか思えてないんだ。」

「それは問題だな……。　桃香はこれからそんな場面を何度も体験するから今のうちに慣れておこうな？」

桃香「ぜ、善処しま～す。」

そうして行軍する事1刻半、使者が戻り官軍から返答がきた。

『誠に感謝します。そちらの部隊と合流すれば勝機は我らにあります。是非ともお会いして話し合いましょう　桃香』

官軍　中郎将　【盧植】

～驚愕！？　黄巾党の本気～（後書き）

早速、官軍の敗北です。

ところで、演義では桃香こと劉備が黄巾の乱で早速華々しい活躍をされますが、正史ではどうでしょうか？

正史『三国志』によると劉備らが侯校尉の鄒靖に従って黄巾党討伐に手柄を立てたため安喜の尉に任命されたという記載はあるが演義のような活躍の記録は見当たりません！

それどころか「裴松之」注釈の『典略』ではかなり滑稽に描かれています。

まぁ内容はあまりにひどいので桃香好きの自分からは何も言いませんが……。

次回から戦闘が入ると思います。

更に長沙からも原作キャラが援軍で来ますよ～♪

～ぶつかり合う思念『江東の麒麟児』ｖｓ『天水の麒麟児』～（前書き）

先に言っておきますが……

『反董卓連合』前に一度この【麒麟児の書】を休刊します。

というのはこの物語は別の物語と連動してるんですよ？

そっちの話も書かないと『天の御遣いと四人の使者』を充分には楽しませんから～♪

閑話休題、それでは相変わらず文才無しですがよろしくお願いいたします！

～ぶつかり合う思念『江東の麒麟児』ｖｓ『天水の麒麟児』～

～官軍・韓馥軍駐屯地～

官軍から書状を受け取った俺達は行軍速度を上げ北上、両軍が構える駐屯地に到着。

兵士達にもそれなりに疲れの表情が見えていたので早速、兵や馬を休める事にした。

当然、駐屯地周辺は両軍の兵が厳重に警備している。

余程、黄巾党との戦いで酷い目に遭ったのだろう。

自分達だけ休む訳にもいかないので、神楽に斥候を放ってもらい、凱は長い遠征で疲労した兵士達の治療をしている。

そして桃香はというと藍里を連れて盧植の天幕に向かっていった。

かつての恩師に会えるとあって桃香はとても張り切っていたが、今は一応戦地にいるので個人的な事よりも軍事を優勢しなくてはならない。

その為に藍里を連れて行ってもらったのだ。

自分が行っても良かったが桃香がいない時の部隊の指揮は俺に任せる事になっている。

つまりは俺が劉備隊の副将の立場な訳で、正直……重いです。

神楽「……そろそろ討ってでる事にしましょう。」

パチン

「あっ！　しまった！？」

そして俺は今、自軍の天幕で神楽と碁を打っている。

さっきまで俺の攻勢を堅守してきた神楽が隙を見て一気に反撃に出てきたのだ。

神楽「攻撃は最大の防御……とは言いますが。　人である限り、永遠ではあるませんよ？

無論、それは碁ではなく戦においての話ですけど…。」

「これが戦場なら、攻め続けて疲弊している部隊はあっという間に崩される……か。」

神楽「フッ……でも、そう易々と崩されないのが貴方ですよね？」

「まぁな。　さて、ここからどう動かしていくべきか……。」

兵士「姜維隊長！　徐晃隊長！」

俺が次の一手を考えていると兵士が1人天幕に入ってきた。

「ん、どうした？」

兵士「この駐屯地に向かって後方から数里離れた距離に例の賊がいるとの報告がありました！」

「やはりな……奇襲部隊か。」

神楽「この事を見据えて斥候を放つよう私に？」

「あぁ、今回俺達が相手をする黄巾党は烏合の衆ではないと薄々感じていたんだ。」

神楽「やはり官軍との戦い方を聞いてですか？」

「いや、南陽で奴等が現れたって聞いた時からかな。
張曼成が砦を占領した時期を考えると袁術や劉表の軍をそっちに向けさせているような気がしたんだ。」

張角率いる本隊がいるのは冀州で間違いない。
劉表軍や袁術軍が来る事で完全に退路を断たれるのを恐れたんだろう。
そして豫州に黄巾党が攻めて来たのも新たな拠点の確保が目的と思われる。

「そして官軍との戦いで伏兵による挟撃……とても賊が出来るとは思えない。」

神楽「やはり……かなり組織化されていますね。」

「そうだな。　恐らく黄巾党の幹部のような存在が指揮しているだろう…って長話してる場合じゃないな。
俺が騎馬を５０引き連れて先行する。部隊編成を急げ！」

兵士「はっ！」

「神楽は盧植の所に行ってる桃香達に伝えてくれ。
その後の行動は藍里に任せれば大丈夫だ。」

神楽「分かりました。　気を付けて下さいね迅さん。」

「あぁ、油断はしないさ。　編成された部隊は俺に続け！」……
……

……
……
……
……

「さてと、こんな小賢しい真似をする武将気取りは一体誰なんだろな？」

俺は騎馬隊５０人を引き連れて伏兵が潜んでいる場所へ向かっている。

俺達桃香の部隊は５つに分かれている。

桃香を守る護衛部隊
神楽が率いる歩兵部隊
凱を筆頭に治療にあたる医療隊
藍里の指示で動く遊撃隊

そして俺の騎馬隊だ。

涼州で生まれた俺は騎馬の扱いにはとても慣れている。

その腕は劉表軍の将が同様に馬に乗り、５人がかりで俺と打ち合っても一本も取れない位だ。

やっぱり強くなった一番の理由はあの『一族』との交流があったお陰だろう。

あの時にやっぱり女の子でも三国志に名前が残る猛将なんだなって実感したな～。

兵士「隊長、前方で煙が上がっています！」

「煙だと？」

見ると確かに煙が上がっている。距離は３里程。

「っ！……この臭いは…。」

そして風に乗って流れてくる煙の臭いはまるで……人を焼いた時の異臭だ。

兵士「前方に人影が見えます！」

さらに煙の方向から１００人前後の集団が見える。

兵士「例の賊でしょうか？」

「分からんが…にしても様子が変だ。」

こちらに向かってくる連中は一斉に声を上げているので、何を言ってるのか分からない。

漸く聞き取れた第一声は……

賊？「た、助けて下せぇ！！」

それは、降伏というよりは救援を求める声だった。

兵士「止まれぇ！　貴様ら、黄巾党だな？　世を乱す輩を助けるなど…」

「待て。」

俺は兵士達を静める。

「その布を巻いてるということは……お前達も張角を崇拝する黄巾党か？」

賊男？「ち、違う！　これはただ、他の連中に付けろって言われただけで……俺は張角なんて見た事もねぇよ！」

そうだそうだと周りも声を上げ挙げ句の果てには黄色い布を外し捨ててしまった。

「なら、なぜ世を乱す？　お前達は何が目的で後漢王朝に逆らう！？」

賊男？「ただ俺達は……住む土地が欲しいだけだ！
俺達は皆、村でのんびり生活してただけなのに、ある日盗賊に襲われて全部失っちまった！
耕す畑がなけりゃ俺達は明日食う米もねぇ！　生きる為にはこうでもしなけりゃ生きていけないんだ！」

よく見れば男に混じって女の人もいる。

家族一同で黄巾党に入っている連中もいるようだ。

賊男？「幸い、あの連中に同行してりゃあ飯は食わしてもらえる。
噂じゃあ村から略奪してる奴等もいるって聞いたが、俺達が居たところは違う！
官軍や腐った役人共の倉に溜め込まれていた食料や物資を皆で分け与えてたんだ！」

賊女？「そうよ！　あのお方は張角の為に戦っているけど、決して私達をないがしろにしないわ！
みんなに平等に行き渡るように自ら食べ物を分配してくれてるの！」

「だが……隠れて俺達を襲撃しようと指示したのもそいつだな？
そして、お前達はそれに従った……。」

俺は得物を向ける。

賊と思われる連中は動揺する。

兵士「隊長……やはり？」

兵士達も剣を引き抜く。

「あぁ、全員……保護しろ。」

兵士「なっ！　隊長！？」

「どうやら、この連中は敵情を知っている。生かしておくほうが良いだろう。」

桃香も理由は違えど、きっと保護を選択するだろう。

「うちの陣営にも食料や寝る場所もあるから安心しろ。
色々と聞きたい事があるからそれに答えてくれれば受け入るよ。
あと……武器は置いてくように。」

賊男？「あ……ありがとうございます！」

「よし、負傷してる奴を乗せてやれ！　ここにいる全員を俺達の陣に送ってやるんだ！」

兵士一同「はっ！」

兵士達が降伏した人を誘導し、人手が必要な人には馬を貸して運んで上げている。

「兵糧は多分大丈夫だろう。　桃香が敵が降参した時用に多めに調整したし。」

兵士「隊長、またこちらに向かう人影があります！」今度は２～３０人前後といったところか。

「あれだけなら対して変わらないか……よし、あの連中も保護…」

兵士「そ、その方向から騎馬隊が出現！　数は先頭が１人、後続に５０人です！」

賊男？「ヒッ……間違いない……奴等が来る！！」

賊女？「早く連れてって！早くしないと私達も……殺される！」

奴等……？

逃げ惑う賊の後方から駆けてくる先頭の人物は剣を手に持ったままこちらに向かって来る。

そして逃げる賊の首を馬上から横一線に切断した。

相手が男であろうと女であろうと一切容赦はしない。

降参だと言ってる相手にすら躊躇なく剣を振り命を刈り結局、その者は逃げていた全員を1人残らず切り殺した。

兵士「……逃げ出した者を始末してるのでしょうか？」

「いや、恐らく逃走した残りを追撃したんだ。つまりは……味方だな。」

追撃を終えた騎馬隊がこちらに近づいてくる。

先程逃走者を殺した者はどうやら女性のようだ。

褐色の肌に淡いピンク色の髪、そして赤いチャイナドレス風の服を着ていて、その姿は王の風格さえ漂わせている。

「お前ら一度、馬を降りろ。　どこの諸侯か分からないが礼節を欠くわけにはいかない。」

馬に乗ってる兵士達に降りるように命じ相手の出方を待つ。

？軍兵士「我等は長沙太守孫策様の部隊である！　そちらは官軍の者か？」

「いや、俺達は荊州刺史劉表の部隊の１つを任されている者だ。
こちらの方角で黄巾党が潜伏していると報告があって来たのだが……。」

？「それなら私達が倒したわ。」

隊長と思われる女性が前に出る。　いや、将軍クラスか？

「……もしや、貴方が長沙の？」

？「えぇそうよ。私の名前は孫伯符。貴方達は？」

「劉表軍　劉備隊の将、姜伯約です。」

孫策「その名前よく耳にするわ。知勇を兼ね備えた英俊にこんな所て会えるなんて……今日はツイてるわね～♪」

賊討伐だけなのに長沙にまで俺の評判が広がってるとはな……。

「まだ客将の身分ですが、そう言ってもらえて光栄です。
ここ豫州に来られたのは官軍と合流する為に？」

孫策「そうよ。その途中で黄巾党を発見したの。
その事で聞きたいんだけど……こっちの方角に逃げた黄巾党がまだいると思ったけど……知ってるわよね？」

先程保護した人達の事だろう。

「えぇ、先程１００人位の数がこちらに降伏してきたんですよ。
ですから、全員保護しました。」

孫策「保護……？　相手は黄巾党よ。　保護する必要ある？」

「まぁ殆どが農民上がりの連中でしたし、色々と敵情を知っていたので一応ですが……。」

孫策「そんな理由で生かすの？
対した情報とは思えないし、第一兵糧を消費するだけで邪魔だと思うけど……。」

「……じゃあ、貴方なら即刻、切り捨てると？」

孫策「当然♪　罪人を斬るなんて当たり前でしょ？」
当たり前……。かなり極端過ぎないかこの人？

「それは違う……余りにも浅はかだ。確かに罪人にはそれ相応の罰が必要だとは思う。時には処断もやむを得ないかもしれません。
けど、何も斬首だけとは限らない。罪にはその重さに見合った罰があるはずだと俺は思います。」

孫策「どういう事かしら？　貴方達が保護した黄巾党には見合った罰があるとでも？」

「保護した連中の多くは自分達の土地を失いました。
だから生きていく為にこういう形ででしか食い繋ぐ事が出来なかったんです。
それに誰一人、打倒王朝なんて考えていません。それ程、みんな生きる為に必死でもがいているんです。　だから、俺は彼等に土地を与えようと思う。　荊州に戻って荒れ果てた土地を自分達の手で開墾させるんです。

そうすればその土地に移住すればいい。多少税は払ってもらいますが、その代わりに土地を再び奪われる事がないように俺達が守ります。　……そんな感じです。」

以前、この件については桃香達と話し合った事がある。

桃香の掲げる理想には所々甘いと思われる箇所もあるけど決して無理とは思わない。

争いや戦がない国は現在の日本を始めとした多くの国が出来ている訳だし、この国でもそこに近付けられる可能性はあるはず。

その1つとして『信賞必罰』の確立を俺達は上げたのだ。

孫策「労役って訳か……私より若いのに随分と考えてるのね。」

「対して歳が違うとも思えませんが……まぁそれが俺達のやり方です。」

孫策「なるほどね～。　けど、今の私達のやり方とは正反対って感じかな。」

正反対……？

孫策「今の私達には功績が必要なの。そして今回の黄巾党の乱は私達にとっては絶好の機会。

貴方達みたいな馬鹿げた理想以前に自分達の事で精一杯なのよ。」

「馬鹿げた……理想？」

孫策「だってそうでしょ？今この国がどんな状況に置かれてるか……知らないはずはないわよね？
客将の地位で満足してるような貴方達がそんな事言ったとしともただの偽善だし……夢物語よ。」

……ブチッ

何かが頭でキレた音がしました。

「そうか……孫策…貴方はとても可哀想な人だ。」

孫策「意図が伝わらないわね……何が言いたいの？」

「言葉通りだ。この乱での功績なんてたかが知れてる。　貴方が言うこの国の腐敗した政治で貴方の現状を打破出来るのか？
夢物語？……それで結構だ！　掲げる理想すらない奴に比べたらよっぽどマシだね。
俺達はその理想を目指している……国のことを想い、国のことを愛し、国のことを本気で考えている桃香の理想をな！！

今の自分達の事しか見えていない奴に人の理想を馬鹿にする資格はない！！」

相手が誰だか分かっている。聞き流す事だって出来たんだ。

けど、これだけは俺は許せない。

人の夢を…理想を平気で笑ったり否定する奴を。

孫策「貴方に……何が分かるのよ」

「……え？」

孫策「貴方に……今私達がどんな状況に置かれていると思ってるのよ！？　何も知らないくせに分かったような口振りしないで！」

ガキンッ！！！

俺目掛けて振り下ろしてきた孫策の剣を俺は如意棒で受け止める。

「あんた、分かってるのか？　剣を向けたからには……命賭けろよ！？」

孫策「貴方が理想を叶える前に私を怒らせた事……後悔させてあげる！」

～ぶつかり合う思念『江東の麒麟児』ｖｓ『天水の麒麟児』～（後書き）

２人目の原作キャラが登場したのに……主人公と直接対決になりました。

実力的には互角ですよ？

けど、アンチとか原作キャラ死亡とか無しなんでそこら辺は上手く話を展開してきます。

さらに韓馥軍からもオリキャラ登場する次回！

目が離せませんよ～♪

～手刀は大変危険なので決して真似しないで下さい　ｂｙ　姜維～（前書き）

まずは一言

更新遅れてスマン！

頭の中では映像が浮かぶが文章上での表現に時間が…

次話の更新は土日中に必ずします！

～手刀は大変危険なので決して真似しないで下さい　ｂｙ　姜維～

～黄巾党討伐軍ｓｉｄｅ～

『後方に黄巾の一団を発見』

その報告が入った時、天幕内の緊張が一気に高まった。

そこには劉備とその恩師　盧植だけでなく韓馥軍の将がいて、これからの黄巾党との戦いに備えて軍議が開かれていた。

各将達は速やかに対策案を検討し、姜維が騎馬隊を引き連れて向かったことから徐庶は彼が黄巾党を誘き寄せて来ると予測し両翼を伏兵とした雁行の陣で待ち伏せて一気に包囲殲滅する策を提案。

盧植、韓馥軍の将ら他の軍もその策に乗り、それぞれ左翼、右翼に布陣。　劉備達は中央で待ち構える形になった。

～劉備ｓｉｄｅ～

桃香「遅いな～迅君。」

雁行の陣中央で待機している桃香は未だに迅が戻って来ないのに不安を感じでいた。

神楽「報告ではそれほど距離はないはずですが……何かあったのでしょうか？」

桃香「でも、迅君に限ってそんな事ないと思うけど…。」

藍里「大丈夫ですよ。多少の時間の誤差は戦ではよくある事ですから。
　それに、迅さんは少数で向かい独断で敵陣に突撃するような人ではないと思います。」

桃香「少なくとも……単騎で突撃した事はあると思うな。」

神楽「私も、記憶が確かであれば……。」

一番始めの厳政の時を思い出し藍里はあっ！と一言。

藍里「あ、あれはやむを得ない状況だったからですよ！」

桃香「それならいいんだけど……」

神楽「桃香様。あれを！　どうやら迅さんの部隊が戻って来たようです！」

前方から姜維の部隊が大勢の人数を引き連れてこちらに向かってくる。

中には自分の馬に怪我人を乗せている兵士もいる。

兵士「劉備様！　た、大変です！」

姜維隊の兵士が1人馬に乗って先行し桃香に報告する。

桃香「どうしたの？　それとあの連れて来た人達って…。」

兵士「あれは、我等に降伏した黄巾党です。　隊長の指示で保護いたしました。」

桃香「降伏…ってやっぱり突撃したの！？」

兵士「い、いえ。報告にあった黄巾党は孫策軍によって壊滅しました！

我々はその残党を発見し保護したまでです。」

神楽「孫策……確かあの『江東の虎』孫堅の娘でしたね。」

桃香「そういえば先生がもう一軍と合流する予定だって言ってたよね。なら良かった♪」

盧植が言っていた事を思いだし、桃香は安堵の息を漏らす。

兵士「そ、それが…その孫策と隊長が……。」

～盧植軍ｓｉｄｅ～

官兵士１「将軍，劉備軍から書状が！」

盧植「書状？　予定では銅鑼の合図のはずですけど……？」

左翼に布陣する官軍中郎将『盧植』が首を傾げる。

ゆったりとした何処かの貴族のような服装に身を包んでいる姿からはとても戦場で指揮する将軍とは思えない。

が、幾多の戦場を経験してきた彼女の目は武を志す者からすれば、

相当の実力者であることが判断出来る。

官兵士１「これがその書状でございます。」

盧植「……。」

渡された書状を開き盧植は内容に目を通す。

盧植「あらあら♪　相変わらず桃香は仕方のない子ですね。」

官兵士１「は？　しょ，将軍？」

官兵士２「将軍大変です！
　劉備軍が突如進軍を開始。
このままでは陣形が崩れます！」

官兵士１「何っ！？　あやつら……策を講じておきながら一体何を…。」

盧植「そうですか……我等もこれより劉備軍に続き前進します。
皆さん準備をなさって下さい。」

官兵士１「将軍！？　よろしいのですか？」

盧植「このまま友軍を放っておく訳にはいきません。　さぁ、他の部隊にも伝えてきて下さい。」

官兵士1，2「ぎょ、御意！」

兵士2人は各部隊へ知らせに走った。

盧植「（もしもの時は私が出るべきでしょうか……。いずれにせよ、最悪の事態にならなければいいけど。）」

～韓馥軍ｓｉｄｅ～

丁度その頃、韓馥軍陣営にも劉備からの書状が届いていた。

？1「つまり、『孫策軍と劉備軍の将が小競り合いをしてるから救援に向かう』……って事？」

？2「簡単に言えばそうだけど……どうしよっか？」

劉備達とさほど歳も変わらない2人の女の子が相談していた。

？1「面倒だけど、行くわよ！私達が共闘しようって時に仲間割れなんて……そんな事してる暇あったら、とっとと黄巾の連中倒して帰ろう。

あのヘタレな君主にガミガミ愚痴言われたくないし、それに早く暖かいお風呂に浸かりたいしね～。」

？２「貴方の本音が見え隠れしてるけど……分かったわ。
各隊に進軍するように伝えて頂戴。」

韓兵士「はっ！」

兵士が各部隊の指示に向かう。

？１「（小競り合いってのが、将同士の一騎討ちなら……必見の価値はあるわね。
フフッ、綺麗な人なら尚更……♪）」

？２「ちょっと『結衣』。顔がニヤついてるわよ。お願いだから人前でそんな顔しないでね。」

？１「わ、分かってるわよそんな事！『澪』私達もさっさと行くわよ！」

姜維・孫策ｓｉｄｅ

孫兵士１「し、信じられん……あの男、孫策様と互角に渡り合ってるぞ！」

孫兵士２「もう既に５０合以上は打ち合ってるぞ……我等の軍でも限られた将でなければあんなの無理だ。」

孫兵士３「お、おい…それよりも早く周瑜様に知らせに行かないと不味いんじゃないか？」

孫兵士２「それなら、先程行かせたから問題ない。
　我が軍も孫策様を追って進軍してるから、直ぐに駆け付けてくるだろう。」

孫兵士１「……その前にあの男の首が飛ばない事を祈ろう。」

孫２「理由が理由だからな。　これで死んだりでもしたら余りにも不憫だ。」

……

……

……

…

な～んて声が聞こえてるが、そう簡単にやられるかっての！

ガキンッ！！

孫策の振るう剣を受け止める。これで一体何度目だろうか？

あの後、暫くは孫策が馬上から攻めてきたが、なかなか思うように当たらない事に苛立ち、結局馬から降りて戦っている。

確かに孫策の言い方には腹が立ち、だから俺もあんな事を言った。
　それは紛れもない事実。

しかし……まさか斬りかかってくるのは予想外だったな。

相手は荊州の長沙太守であり桜香の管轄内の一諸侯である。

いくら正当防衛でも俺が孫策に怪我を負わせるような事があればそれこそ桃香だけでなく桜香にも迷惑が掛かってしまう。

だからといってバッサリと斬られたら孫策の言った通り、マジで後悔する……色々と。

だから今、俺が出来る事といえば……

孫策「ちょっと！　威勢がいいのは口だけ？　貴方ヤル気あるの！？」

「ヤル…って絶対『殺る』だろあんた！？　悪いけど俺の立場上、あんたを傷付ける訳にもいかないし、自分が死ぬのもゴメンだからな。」

極力、孫策の攻撃を避けたり往なしたり、本当に危ない時は得物で受け止めて一定の距離を保つように押し返している。

孫策「私はただ貴方が喧嘩を売ってきたから買っただけ。　原因は貴方でしょ？」

「それはあんたの受け取り方の問題だな。　俺はあんたが言った事をただ訂正してくれれば良かっただけだ！」

戦っている最中、こんな会話をしているなんて異様だが、本人らはいたって『真剣』である。

孫策と鍔競り合いに持ち込み硬直状態が続いていると前方から土煙が……。

不味い……孫策軍の本隊だ。

もしも向こうから加勢で『程普』みたいな猛将に来られたら、十中八九負ける。

いや、あくまで『今の俺』であればの話か……。

俺の兵士にも桃香達に伝えるよう向かわせたが、こっちは恐らく藍里の指示で雁行の陣で待ち構えてるだろうから、時間的にはもうちょい遅れるだろう。

？1「策殿ーー！！」
？2「雪蓮様！！」

こっちは予想通り2人の将を寄越したか。因みにどちらも女性だ。

1人は随分と若いな……朱然、それとも蔣欽か？

もう1人は逆に大人の女性……まさかマジで程普か！？

孫策「あら、『祭』に『思春』。丁度いい時に来たわねっ！」

孫策は競り合っていた状態から俺を押し退け2人と合流する。

？（祭）「全く……あまり1人で先行しないで下され。あれほど『冥琳』に忠告されておったのに……。」

？（思春）「『蓮華』様も心配しております。もしもの事があったらどうするおつもりですか？」

孫策「2人共、話は後でいくらでも聞くから……まずは彼をどうにかしないと。
今がそのもしもの時に近い状況なんだから。」

？（祭）「何じゃと？　お主、何者だ？」

？（思春）「貴様……雪蓮様に一体何をした！？」

駆け付けた2人も武器を構える。

弓と曲刀か？というより真名で呼び合っていて結局誰かサッパリ分からん。

「俺は姜維。劉表軍の客将だ。　別に何したって事じゃあ……」

孫策「私達が逃がした黄巾党の残党を擁護した……でしょ？」

「なっ！？」

？（祭）「ほぅ……。」

？（思春）「擁護……だと？」

「ふざけるな！　俺はただ降伏した黄巾党を保護しただけだ！
それを……擁護だと？」

孫策「保護って言うのは貴方の言い分。　私達は『黄巾党の殲滅』が目的なの。１人残らず……ね♪」

そちらから見れば黄巾党を庇い任務を妨害する邪魔者って訳か…。

孫策「私が貴方に言った事は訂正しないわ。　私は私のやり方でこのまま突き進んでいく。
そして……私達、孫呉の宿願を果たすまでよ！」

剣先を俺に向ける孫策

後の２人も既に臨戦態勢。
あちらさんの軍は止める気ないのかよ！？

桃香「迅君！！！」

後ろから聞こえる声。
間違いない……桃香だ。

振り返ると桃香が的盧に乗ってこちらに駆け付けてきている。

何人か護衛がいるようだが流石は的盧だ。他の馬に比べて断然速く護衛を置き去りにしてしまっている。

「桃香……。」

思わず桃香の方を振り向く。

桃香「迅君やめて！　今は孫策さんと戦っている場合じゃないでしょ！？
詳しい話は後で聞くから取り敢えず武器を……」

その瞬間、後方から放たれる殺気が今までで一番強くなった。

桃香「っ！？　迅君避けて！！」

あぁ、やっぱり孫策が斬りかかってきたか。
俺が無防備に背を向けている所を狙って。

そして孫策は俺の背中にそのまま剣を振り下ろした。

その直後、俺は孫策の剣の太刀筋に沿って反転し、スレスレで攻撃を交わす。

孫策本人は完全に死角からの攻撃を避けられて驚いた表情をしている。

そして俺は避けている間に僅かに手に気を込め、孫策の首の後ろに手刀を下ろした。

孫策「ッ！？……」

小さなうめき声の後、孫策は気を失い俺は地面に倒さないように抱き抱える。

孫策が俺に剣を振り下ろしてからここまでの時間……約０，３秒。

桃香達からしたらいきなり孫策が気絶したように見えただろう。

勿論、孫策には傷どころか痣１つ付いていない。

しかし、そんなのは近くで見てみないと分からない訳で……。

？（祭）「策殿っ！！」

？（思春）「貴様ぁ！！」

当然のごとく激昂してしまった２人

祭と呼ばれた女性は弦を引き絞り、思春と呼ばれた少女は既に俺の側面に回り込んでいた。

「（ッ！！想像以上に速い！？）」

？（思春）「死ねぇ！！」

彼女は俺の頸動脈に一閃。

ガキンッ！

俺と彼女の間に割って入り、
『応龍偃月刀』で必殺の一撃を防ぐ人物……神楽だ。

「神楽！」

神楽「やはり貴方は……少し無理をなさる傾向がありますね。
これ以上桃香様にご心配をさせないでくれませんか？」

？（思春）「……チッ！」

仕留め損ねた少女が舌打ちをし、少し距離をおく。

？（祭）「策殿に手を出しおって……ただでは済まさぬぞ！」

ヒュッ！！

今度は弓を構えていた女性が俺に向けて矢を放つ。
その数は3。　しかも孫策に当たらないよう、しっかりと俺の額を
狙っている。

孫策を抱えたままでは避けきれず、せめて身体をずらして一本を肩に……と思ってた矢先。

ヒュッ！　バシィッ！

後方から同様に矢が３本放たれ、俺に当たる前に撃ち落とされた。

「えっ……？」

？（結衣）「あんたら人の領地で何やってんの？
やるって言うなら黄巾党倒してから、自分達の領地でやってくれないかしら？」

後ろを向くと初めて見る女性が１人。

持っている弓は孫策軍の女性に比べるとかなり長い……自分の背丈はあるだろうか？

？「祭殿、思春！武器を下ろしなさい！！」

今度は孫策軍から黒髪のロングヘアーに眼鏡を掛けた女性が新たに

現れ、2人に命令する。

？（祭）「冥琳、何故じゃ！？　あやつは策殿を……。」

？（冥琳）「雪蓮の部隊に話を聞いたが、どうやら原因はこちらにあるようです。
　それに、雪蓮は気絶しているだけ。　姜維とやら、こちらに雪蓮……孫策を渡してくれるか？」

「……分かった。」

俺は素直に従い、受け取りに来た孫策軍の兵士に彼女を預けた。

？（冥琳）「祭殿も下がってもらって結構です。
　後で事情を詳しく聞かせてもらいますから……そのつもりで。
思春も例外ではないぞ？」

？（祭）「うっ……。」

？（思春）「……御意。」

冥琳の鋭い視線に圧倒されて2人も渋々、引き下がった。

桃香「迅君……。」

桃香が俺の側に駆け寄る。

「桃香……俺は」

言いかけた俺の口に桃香が人差し指を当てる。

桃香「今はいいから。それよりも…迅君に怪我がなくて良かった。
ただ、今はそれだけで十分だから…。」

？「両軍、よろしいですか？」

突然声を掛けられ目をやると、またしても初めて見る女性が馬に乗り、こちらに来た。

桃香「先生。」

先生って事はこの人が桃香の恩師……盧植か。

盧植「この件に関しては両軍の話し合いで解決する事。　行使による解決の場合、こちらから厳正な処罰を下しますので覚悟して下さい。
どちらもよろしいですね？」

桃香「はい！」

？（冥琳）「承知しました。」

……と、官軍の盧植による仲裁もあり、一先ずこの揉め事に区切りをつける事が出来た。

～手刀は大変危険なので決して真似しないで下さい　ｂｙ　姜維～（後書き）

揉め事で一話終了……。

やっぱ駄目だ俺ｏｒｚ（泣）

原作キャラやオリキャラも登場したけど、結局真名止まり。

原作キャラは分かるとして韓馥軍の将についてはここで軽くヒントを…。

？１のオリキャラは三國無双シリーズの「美しい人」です。

？２のオリキャラはマイナーな袁紹軍の軍師です。

元韓馥軍となればかなり限られると思います。

～『劉備と孫策』～（前書き）

なんとか日曜投稿！

結構な数の人が見てくれているようで嬉しいです。

感想や質問とか指摘とか駄目出し等コメントは全然ウェルカムなんでよろしくです！！

～『劉備と孫策』～

～劉備隊　華陀診療所天幕～

「凱、いるか～？」

凱「あぁ、迅か。　どうした？」

中に入ると凱は木簡に墨で何か書き込んでいた。

「一刺し頼む。」

そう言いながら俺は寝台に腰掛ける。

凱「……またアレを発動させたのか？」

「仕方ないだろ。相手はあの孫策だぞ？　下手したら死ぬから本当に。」

凱「はぁ～、分かった。じゃあ
そこへうつ伏せになってくれ。」

「あいよ。」

俺は凱に言われた通り寝台にうつ伏せになった。

そして凱が懐から針を取り出し気を込める……

凱「一刺入魂(いっしにゅうこん)！！元気になぁれぇぇぇ！！」

プスリと背中に一刺し。

「ん～♪　…よし、復活！！」

勢いよく起き上がり軽く伸びをする。

凱「その能力、あまり多用するなよ。多用すればする程、その反動で…」

「分かってる。今回はほんの少しだ。戦いの前に体調は万全にしておこうと思っただけ。」

俺はさっきまで凱が座っていた椅子に座る。

「凱こそ大丈夫か？　今回は兵士だけじゃなく、投降した黄巾党の治療もしたんだろ？」

凱「心配は無用だ。俺の凰羅(おうら)はまだまだこんなものではない！」

「出番もそれ程、多くないし。」

原作キャラなのになぁ～……。
（作者の声）

凱「出番…って、正直戦場ではそっちの方がいいだろ普通？　それに、俺はお前みたいに武に秀でてはいないし、藍里のような知謀もない。けど、俺には多くの人の命を救う力がある。
だから、戦場では武官であるお前が重要だ。俺は裏でお前の支援をする。少なくとも、今はそれで十分だ。」

「持ちつ持たれつの関係だな。」

凱「そういう訳だ。　第一、今さっきまで俺も俺なりに仕事してたんだぜ？」

そう言って凱は俺が座る椅子の後ろを指差す。

「……何だコレ？」

そこには二束程の木簡があり、何か書かれていた。

凱「俺が黄巾の連中の治療中に聞いた敵情を書き留めておいた。
軍議の時にでも使ってくれ。」

「おぉぉ！！　礼を言うぞ凱！！これは本当に助かる！」

改めて男の友情は良いものだと実感したぜ！

凱「……で、その孫策との一件はどうなったんだ？」

木簡を手に取る俺に凱が尋ねる。

「あぁ、実はな……。」

あの騒動の後、桃香達にたっぷりと灸を据えられ、孫策に謝る為に彼女の陣営に行った。

俺にも言い分があったが桃香はよしとせず、孫策の見舞いも兼ねて私と行くように、と上等な酒も渡されて……。

孫策の天幕に着き、出迎えてくれたのはあの黒髪の女性と孫策と同じ髪色の大人しそうな美少女。

名前を聞いたら、あの「周瑜」と「孫権」ときたもんだ！

孫策はまだ眠っているので天幕には入れず、俺達は周瑜，孫権の2人に一連の騒動を陳謝する事にした。

（説明中……）

凱「ふむ……まぁいずれにせよ、関係が悪化しなかっただけ良かったな。」

「まぁな、周瑜も孫権も此方に非があったと言って頭を下げてくれたし、　逆に俺達から何か要求があれば謝罪の意を込めて応えてくれるそうだ。」

凱「ほぅ、桃香は何と？」

「『一緒に協力して、この乱を終わらせよ♪』…だとさ。」

凱「全く…桃香はブレないな。」

「いつもの事だろ？　さて、そろそろ軍議が再開するから俺は行く

ぞ。」

凱「おぅ。行ってこい！」

……

……

……

……

盧植「それでは、これより軍議を再開します。まずは初めて顔を合わせる人も多いようですし、自己紹介からいきましょうか。」

盧植の広い天幕に孫策軍，韓馥軍，そして俺達劉備軍の各代表が集まり軍議が開かれた。

黄巾党との一戦を前に空気はかなり張り詰めている。

盧植「では私から……何進大将軍より派遣された官軍中郎将　盧植と申します。どうぞ宜しく。」

盧植は礼儀正しく一礼する。

盧植「次は…韓馥軍の方から。」

？（結衣）「よしきた！　んじゃ私から…。」

指名された韓馥軍の将が立ち上がる。

俺を助けてくれた弓の女性だ。

？（結衣）「私は張恰　字は儁艾。一応今回、韓馥軍の大将を任されてるわ。　こっちは沮授。我が軍の軍師よ。」

？（澪）「以後お見知りおきを。」

張恰の後ろで立っている女性が頭を下げる。

張恰に沮授……。

２人は史実では確か袁紹に仕えて…いや、元々韓馥軍の将だったから別に不思議ではないか。

孫策「なら、次は私達ね。」

次にその隣に座る孫策が立ち上がる。

孫策「孫伯符よ。荊州の長沙で太守をしてるわ。　そして…」

周瑜「軍師の周公瑾だ。宜しく頼む。」

2人が一礼し、孫策が席に着く。

次は桃香の番だ。

桃香「ふー……はー……。」

桃香が深呼吸をしゆっくりと立ち上がる。

桃香「私は荊州刺史の劉表さんの命によりこの地に派遣されました劉備　玄徳と言います。
彼女は私達の軍師をしている徐庶ちゃんです。」

「じょ、徐元直です……宜しくお願いします。」

ちゃん付けされて恥ずかしかったのか、藍里が頬を赤くしながら一礼する。

桃香「そして彼は私の補佐をしてくれる副将の」

孫策「姜維…伯約…でしょ？」

「っ！？」

机に肘を付ながら髪を弄くる孫策に言われてしまった。

桃香「え、え～と…孫策さん？」

孫策「深い意味はないわ。ただ、知ってたから言ってみただけ……。」

孫策さん……こ、恐いです。

周瑜「はぁ……本当にすまない劉備。他意はないんだ。」

桃香「いえ、私は大丈夫です。」

張恰「どうせ、彼に負けたから悔しいだけなんでしょ？」

孫策「……っ！」

沮授「ちょっと結衣！？」

手に顎をのせ、張恰がニヤニヤと孫策を見る。

張恰「3対1の状況で、しかも彼が背中を向けていた時を狙って不意討ちなんて……美しくないわよね～？」

孫策「……。」

孫策は一向に反論せず押し黙っている。

周瑜「張恰殿、失礼だがそれは」

「孫策殿を悪く言うのは止めて下さい。張恰殿。」

張恰「あら？」
孫策「……？」
周瑜「……！」
桃香「迅君？」

俺は桃香の横まで来て張恰に忠言する。

「背中を向けたのは自分の意思です。対峙している最中、背中を向けるのは愚の骨頂。
つまり自分の過失であり、そこを狙った孫策の行動は正しいと思います。

それと……この件は俺と彼女達の問題ですから、横槍を入れるような発言は控えて貰えますか？」

張恰「あんた……私がいなかったら今頃、頭に矢が刺さっているのよ？　命の恩人なんだから、少しは感謝を」

「確かに感謝はしています。だがしかし、それと孫策殿の件は別。それとも、貴方が孫策殿に何か言える事情があるんですか？」

張恰「そ、それは……。」

沮授「結衣！往生際が悪いわよ！　貴方が今何をすべきか……分かるでしょ？」

張恰「……。」

沮授に一喝され、張恰は立ち上がると孫策の近くに行き、彼女の前で跪いた。

張恰「先程、部外者の身でありながら貴殿に対して大変なる失言をいたしました。
本当に……申し訳ございませんでした。」

……あんな態度をとっていたが、案外常識人なんだな。

孫策「……顔を上げて張恰。もういいから。」

孫策は優しく張恰の肩に手を置き、戻るように促す。

孫策「それに……そもそもの原因は……私なんだし。」

そう呟くと孫策は桃香の方へ向き直る。

孫策「劉備、貴方……変わってるわね。」

桃香「えっ？　私！？」

孫策「仮にも私は本気で貴方の仲間を殺そうとした。　私だけじゃない……祭や思春だってそう。

けど、貴方達は私の陣まで訪れて冥琳や蓮華に頭を下げて、見舞いにとか言ってあんな良い酒まで私にくれた。

仕舞いには私達に要求した事が『協力して乱を終わらせよう』……って。」

そこまで言うと孫策は両手で机を叩き俺達を睨み付ける。

「どうして？……どうしてそこまで出来るの！？　貴方には大きな理想があるくせに誇りや自尊心がないっていうの！？

劉備、貴方は一軍を任された大将よね？　そんな貴方がペコペコと人に軽く頭を下げるなんて……一体何考えているのよ！？」

周瑜「雪蓮……。」

その目にはうっすらと涙が溜まっているように見える。

桃香「それは……みんなの事です！！！」

孫策「みんなの……こと？」

桃香「はい！　迅君や藍里ちゃんだけでなく軍の皆さん、先生の軍、張恰さんの軍、孫策さんの軍。
　そしてこれから戦う黄巾党の皆さんを含めた、この国で苦しんでいるみーーーんなの事です！！」

両手を精一杯大きく広げて表現をする桃香。

桃香「基本的に自分の事は頭にありません。　私は力もないし、頭も悪い……孫策さんに比べたら全っ然駄目なただの元筵売りの女の子です。
　だから、今の私には誇りとかそういうのはないんです。私が頭を

下げてその場が収まるならいくらでもします。
　そんな事よりも、私は一刻も早くこの国を救いたい！それには皆さんの力がないと駄目なんです！孫策さんの力も必要なんです！
　だから私は……この国を思う皆さんに頭を下げてお願いします！！」

孫策「……。」

桃香「……。」

長い沈黙が続く。

孫策「……2人目よ。」

桃香「えっ？」

孫策「ここまで自分の意志を貫き通す人よ。　相手が誰であろうと決して曲がる事のない信念…。」

ようやく落ち着きを取り戻した孫策が笑みを溢す。

孫策「雪蓮……私の真名よ。貴方に……預けるわ。」

桃香「えぇぇ！？」

「そ、孫策殿……。」

周瑜「雪蓮！　貴方一体…。」

孫策「けど、約束して。その信念……貴方の理想…最後まで突き通す事。
　それが……私達と敵対する事になったとしても……ね。」

孫策が真剣な表情で桃香の目を見つめる。

桃香「……分かりました。
　けど、もしその戦いで私達が勝ったとしても……斬首はしませんからね？」

孫策「あら、勝つ気でいるの？　私には冥琳がいるから絶対負けないわよ～。」

ねぇ～冥琳♪　と周瑜にウィンクする孫策。

周瑜「私としては、戦わないでいるのが最善なんだかな……。」

桃香「わ、私にだって迅君がいるから……負けないもん！」

そう言って俺の腕を引き寄せる桃香。

「おい！　そこは藍里じゃないのかよ！？」

張恰「ふ～ん……2人はそういう仲なんだぁ～♪」

張恰が茶化しに入る。

「な！？…ち、違うって！」

孫策「良いじゃない別に。とってもお似合いよ～！」

「そ、孫策殿まで……。」

孫策「貴方も私の事は雪蓮で良いわ。　お酒の礼も兼ねてね♪」

「理由軽過ぎやしませんか！？」

藍里「皆さん、本当にごめんなさい！」

沮授「いや、徐庶が謝る事ではなかろう。」

周瑜「全くだ。根本的原因は我が主にあるんのだからな。……はぁ〜。」

盧植「あらあら、これでは収集がつきませんね。」

そんな会話で盛り上がってしまい、結果的に本格的な軍議に入ったのは半刻後であった……。

～『劉備と孫策』～（後書き）

オリキャラ本格登場しました！

張恰と沮授の２人です！

実際は恰の漢字が合に「おおざと」ですが……漢字が出ませんでした（涙）

因みに豫州刺史の孔抽も抽の字が実際は「にんべん」に由なんですけどね。

変換できない字についてはカタカナではなく似た字で表記したいと思います。

ところで、なぜ田豊ではなく沮授かと言うと……あっちの陣営に既に『彼』はいるからです！

見た目や風格については後々公開したいと思います！

神楽や藍里の方も待ってて下さい！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0445u/

真・恋姫†無双 ～天の御使いと４人の使者～ 【麒麟児の書】

2011年9月12日01時46分発行